

# FALLS ADVENTURE

オカタヌキ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

八歳の誕生日、日野健太はプレゼントにサンのカセットと攻略本を買って貰う。しかしその帰り道、暴走自動車の事故に巻き込まれ、意識を失う。

目を覚ました時、彼はポケモン世界のホウエン地方にいた。オダマキ博士の息子として育てられたケンタは、ポケモン達と共に成長していく。

そして五年後、彼は旅立つ。自分は何者なのか、そして、自分の世界の痕跡を探すために。

※以前書いてたポケモンのリメイクのつもりだったのに、もはや原型もない件

# 目次

## 序章

F a l l	1
キャラ紹介	9
時流れてとんぼがえり	13
ホウエン	
ココロふるいたてる、冒険の旅へ	20
102番道路 シンクロする思い	30
へんげんじぎいの襲撃者	36
トウカジム センリvsケンタ	44
タチフサぐパンクな刺客	55
ゆうきを翼に込めて飛べ 前編	64

## 序章

### F a l l

2017年、大阪。駅のホームから少年が駆け出し、そのあとを父親が追うように出てくる。弾ける笑顔のその下には、ポケモンセンターのビニール袋が大事に抱えられていた。

「父さーん！はよっ、はよ家帰ろっ!!」

「わーったわーったって。そんな急ぎなや」

彼の名前は日野健太。この日、八歳の誕生日を迎える。

誕生日を迎えた彼は、父に以前から行きたいと言っていたポケモンセンターに連れて行って貰い、そこでポケットモンスターサンゲームソフトと、その攻略本を誕生日プレゼントに買って貰った。

ポケモンセンターで倒れるほど遊び回って、電車の中ではうつらうつらと船を漕いでいたというのに、今すぐにも遊びたいとウズウズしている息子の様子に、父は顔を綻ばす。

「はよーはよ行こらよー!」

ピョンピョンと跳ねるように主張する健太。二人はやがて交差点に差し掛かっていた。

「そない急ぐなゆーとるやん。ほら、もうすぐ交差点やから、手え繋ごら」

「えー、イヤやあ。俺もう8歳やで」

「えーっ！なんでや〜?! えーやん！繋いでくれたらえーや〜ん！お父ちゃんと手ー繋いでくれてもえーや〜ん!」

「父さんキモいわ」

「ひどっ!」

体をくねらせて迫る父をバツサリと切り捨てる健太。父がショックを受けているのを尻目に、横断歩道の前まで駆けて行く。父はブルー垂れながらもそのあとを追った。

そして、父が追い付くと同時に信号は青になり、健太はそれと同時に再び駆け出す。

「父さーん！ほらっはよー！」

横断歩道の中程まで来た所で健太は振り向き、父へ呼び掛ける。すると、遠くの方から人の叫び声と、そして何かが擦れるような大きな音がする。それが車のタイヤが擦れる音とは、その時の健太にはわからなかった。

「ツツ!? 健太!! 逃げろー!!!」

突如、父が鬼気迫る表情で走って来る。父の見たこともない顔に、健太はわけがわからなくなる。

「え、なん」

その時、健太の体に浮遊感が襲う。まるで世界がゆっくりと動いているかのような感覚に、健太は一瞬呆然とするが、直後全身を殴られたかのやうな激しい痛みが襲う。泣き叫ぼうとしても出来ず、混乱する健太の目に写ったのは、目の前を覆うほどの大きな黒い塊がすぐそこまでに迫っている様子だった。

「健太っ!!! 嘘やろー！おいっ健太ああああ!!!」

その日、八歳の誕生日を迎えたばかりの子供が、暴走する自動車に跳ねられるという凄惨な事件が起きる。状況から見ても、少年の即死は確定だった。

しかし、不可解なことに、その少年の遺体は何処にも見つからず、肉片は愚か血の一滴も現場に残されてはいなかった。

少年の身柄は、未だ見つかっていない。

ポケモンワールド。やぶれた世界。

その日、世界の裏側を支え、均衡を守る龍神は、表の世界に異物が入り込むのを感じた。

世界に生じた小さな歪み、それから零れ落ちた何か。世界の均衡を守るソレは、自身の役割に順じ、その異物が歪みを広げる前に始末しようとして、その目の前に現れた。

それは、今にも息絶えそうな人間の幼態だった。

人間、古来から世界を裏側から見て来た龍は当然ソレを知っていた。

ポケモンよりも脆弱で何の能力も持たない癖に、知恵が回って数が多く、幾度となく世界に混乱をもたらして来た録でもない生き物だ。

これはその幼態。しかも異世界からの異物だ。成体になった時、どんな歪みを生むかわかったものではない。幸いに、重症を負ったのか、今にも死にそうだ。念のため、ここで確実に始末してしまおう。そう思い、龍は自身の翼を鋭い爪に変え、その人間に振り降ろそうとした。

しかし、その前に立ち塞がるものがある。

それは、魔獣ポケモンだった。

創造主たる母なる神より産み出され、曲がりなりにも自分の同族に当たる魔獣が、自分の前に立ち塞がっている。

一匹、また一匹と集まり、幾多もの姿形の魔獣が、その人間を守るかのように立ち塞がっていた。

”どういうつもりか?”

そう意識を込めて自身の威プレッシャー圧を向ける。それで魔獣達は竦み上がり、ガタガタと震え出す。

自分は調停者だが殺戮者ではない。濃厚な死の波動を感じれば、彼らも逃げ帰るだろう、そう思った。

だが、彼らは動かなかった。

自分には絶対に敵わないととつくに悟った筈だ。生への執着が悲鳴を揚げている筈だ。なのに、彼らは逃げなかった。

”なぜそれを庇う?”

龍は魔獣の言葉で語りかける。魔獣達は驚き固まるが、やがてその中の一体が、震える声で答えた。

『生きたいと、泣いていたから』

その答えに、龍はじつとその人間を見る。それは、今にも消えそうな弱々しいものだった。だが、龍は確かに命の鼓動を感じた。

今まで表の世界を支えて来た世界の裏側。自分の分身とも言える、自分以外に何も無いその世界では、決して感じることはない、暖かな光だった。龍にはそのちっぽけな光が、余りにも眩しく思えた。

そして、龍もまた感じた。今にも消え絶えそうなその命が、必死に生きようと足掻いていることを。

その時、龍の心にある思いが芽生えた。調停者としてあるまじき思いだ。あつてはならぬ考えだ。だが、確かに感じたのだ。

”生かしてやりたい”、と。

龍は自身の思いに困惑した。だが、同時に悟った。自分もまた、生命なのだ。自分以外何もない静寂の世界で悠久の時を過ごし、久しく忘れていた感覚であったが、確かに自分は生命いきものだった。

龍は再びその人間を見た。

いいだろう。分け身きようだいたちは時空の狭間で好きにやっているのだ。ならば自分も、たまには自分の思うままに動いても文句はなからうさ。

そうして龍は、爪に変えた翼をゆつくり、ゆつくりとその人間に触れる。そして、自分の生命いのちの、ほんの一欠片をその人間に分け与えた。

どうせ悠久にも等しい自分の命だ。ほんの砂粒ほどの欠片くらいやっても構わんだろう。そうして龍は、その人間の命の鼓動が安定するのを感じた。その瞳が優しく微笑んでいたのを、龍は知るよしもなく、ポケモンたちだけが目に見ていた。

”生きてみよ”

そう言い残し、龍は世界の裏側へと去って行った。

ホウエン地方・マボロシ島。ホウエン地方の各地に点在し、深い霧で覆われ、特殊な磁場によって衛星にも写らぬ未開の島。

ポケモン研究家のオダマキ博士は、その内の一つに生態調査に赴いていた。ゼブライカ、カメテテ、ネイティ、ネイティオ。ホウエン地方では見られない、もしくは数の少ないポケモンたちに、オダマキ博士は興奮を隠せなかった。

「いやーっ、実に素晴らしい！ここはまさに天国だ！」

ゼブライカの電気ショックで焦げた髪をかき上げながら、オダマキ博士はカラカラと笑う。すると、林の先で動く影が目に入る。見ると、けんかポケモン・バルキーが、山のようにオボンの実を担いで走って行く様子だった。

（群れか家族に持って行くのかな？）

オダマキ博士は遠巻きに追いかけてみることにした。気づかれないうよう、一定の距離を保ち、慎重にあとを着けて行く。やがて、バルキーは林の奥の木のウロへと到着した。

「なっなんーっ!？」

思わず叫びそうになり、オダマキ博士は慌てて口をふさぐ。そこには、バルキーだけでなく幾つもの種類のポケモンが集まっていた。

ヒノアラシ、スコルピ、コンパン、ニューラ、ラツキー、ミミロル。いずれもハウエン地方では滅多に見られない珍しいポケモン達だった。

種族もタイプも違う複数のポケモン達が集まっている。一体そこに何があるのか、オダマキ博士は双眼鏡でウロの中を覗き込み、そして驚愕する。

「なっ!?!…なんだって!?!」

それは、人間の子供だった。怪我をしているのか、息は荒く、寝たままになっている。ポケモンたちは、その子供を代わる代わる介抱をしているようだった。濡り潰したオボンの実を喉に流し込み、ラツキーが”癒しの願い”をかけて、ニューラが”凍える風”で冷やした葉を患部に当てている。その様子に、オダマキ博士はしばらく呆然と眺めていた。

『ッ!?!ピキー!!ピキー!!』

すると、ポケモン達の内の一体、コンパンが騒ぎ出す。その鳴き声にオダマキ博士は我に帰り、しまったと頭を抱える。

（コンパンの優れた目を忘れていた！）

コンパンの目は複数の目が集まった複眼であり、更にその一つ一つが熱源を感知するリーダーなのだ。騒ぎ立つコンパンの様子に、周りのポケモン達も警戒を強める。



オダマキ博士はどうしたものかと頭を抱えるが、衰弱した子供の姿が頭をよぎる。気づけば、オダマキ博士はポケモン達の前に歩み出ていた。

『フシャーッ!!』

『キチチチチチッ』

『キュルルルルッ!』

ニユーラが毛を逆立てて爪を突き出し、スコルピが爪から毒液を滲ませ、ヒノアラシが炎の鬣を逆立て威嚇する。他のポケモン達も臨戦態勢であり、その子供を守ろうとしているのは一目瞭然であった。

それを見たオダマキ博士の行動は速かった。背負っていたリュックを地面に置き、上着を脱ぎ捨て、ズボンに手をかける。やがてまどろっこしくなったのか、ベルトを引きちぎり、無理やりズボンを降ろすと、ゆっくり、ゆっくりとポケモン達に近づいていった。

「大丈夫、大丈夫。キミたちやその子にはなにも危害を与えないよ。絶対に傷ついたりはしない。大丈夫、大丈夫だ。」

そう言って、ゆっくり、ゆっくりと、ポケモン達の目の前にまで近くと、じつと彼らを見つめる。

「僕にその子を診せて欲しい。大丈夫だ、決して傷ついたりしない。僕を信じてくれ」

そう言ってポケモン達をじつと見つめる。ポケモン達は顔をそれぞれ合わせると、やがてゆっくりと道を開けた。

「ありがとう。」そう言ってオダマキ博士は子供に近づく。見れば、まだ10歳にもなっていないだろう幼い子供だった。なぜこんな所にいるのか。なぜこんな怪我をしているのか。そんな疑問は捨て置き、その子供の胸に手を置き、慎重に身体を触る。自分の専攻はポケモンだが、曲がりなりにも生物学者だ、有り合わせの診察くらいは出来る。

（心臓はなんとか動いている。そして、全身に打撲。まるでトラツクにでも跳ねられた様だ。だが、徐々に治りかけている。こんな子供がこれだけの怪我をしていて？ポケモン達<sup>ら</sup>が治療したのか？いや、そ

うだとしても……)

そんな考えを巡らせつつ、オダマキ博士は自分のリュックへと向かう。そして中の救急箱を取り出すと、慎重に服を脱がせ、全身に傷薬を塗り、包帯を巻いた。

「応急処置ではあるが、手当てをした。だが、本当に治そうと思ったら、人間の病院に連れて行かねばならない。人間の街にだ。」

それを聞いたポケモン達は顔を見合わせる。薄々気づいていたことだ。自分たちでは彼を完全に治すことは出来ない。オダマキ博士は再び真剣な声で語りかける。

「信じて欲しい。この子は絶対に死なせはしない。約束するよ。この命に替えてでも」

そう言つて、オダマキ博士はじつとポケモン達を見つめる。ポケモン達もまたオダマキ博士の目をじつと見つめ、そして博士へと近づいた。

「…君たちも、見届けると言うのかい？」

ポケモン達は皆頷き、それを見た博士もまた頷き返した。

「わかった。行こう」

歩きだそうとする博士だが、それをバルキーが引き留める。バルキーの指差す方を見ると、自分の脱ぎ散らかした服が目に入った。

「こつ、こりや失敬！」

そうして博士はあわてて服を着こんで、ポケモン達を連れてボートを出した。ボートの中、運転をするオダマキ博士に、ラツキーがお腹のポケットから袋を手渡す。

「これは……？」

ポケモンの絵が描かれたビニール袋、その中を見てみると、見たこともないポケモンの絵が描かれた何かのケースと、ポケモンの絵の描かれた分厚い冊子。そのうしろに、拙い字で書かれた、ひの けんたの文字。

「ひの……けんた君。キミは一体……？」

そうして博士はボートを走らせ、圏内の島へたどり着くと急いでカナズミシテイの大病院へ電話を入れる。やがてその子供はドクター

へりによつてカナズミ大病院へと搬送され、緊急手術を受ける。手術から少年が目を覚ますまでの1ヶ月間、オダマキ博士とポケモン達は、片時も側を離れることはなかった。

そして、それから実に、七年の月日が流れた。

## キャラ紹介

ケンタ：15歳

本名、日野健太。本作主人公。8歳の時交通事故に合い、何故かポケモン世界にトリップする。オダマキ博士にマボロシ島で助けられ、彼に息子として育てられる。基本的に標準語だが時々興奮したりすると関西弁になる。

オダマキ博士や妹分のハルカ、そしてポケモン達を本当の家族のように思い大事にしているが、それでも現実世界の家族のことを忘れずにいる。

自分は何故この世界にやって来たのか、オダマキ博士のワールドワークを手伝いつつ、元の世界の痕跡を探して世界中を旅している。

オダマキ博士

ポケモン世界におけるケンタの育ての親。ケンタを我が子も同然に思っており、彼にポケモンの生態的知識を教える。ケンタが元の世界の痕跡を探すことを内心複雑な思いを抱いているが、彼の行く末を見守ることを誓っている。

ハルカ：12歳

オダマキ博士の娘。ケンタをとて慕っており、兄以上の感情を抱いている。

旅立ちの日、ケンタや父の抱える秘密を知る為に、彼に同行することにした。パートナーはアチャモ。

センリ：トウカジム ジムリーダー

オダマキ博士とは学生時代からの友人でケンタの師匠。彼もまたケンタのことを気にかけており、ジムリーダー権限によって影ながら支えている。ケンタにバトルにおいてトレーナーに必要な胆力や分析力等を叩き込んだ。

ユウキ：12歳

センリの息子。ジョウト地方から引越してきた。ケンタとも顔見知りで兄の様に慕っている。父や兄のように強くなりたいと思い、

ケンタとハルカと共にジム巡りの旅に出る。パートナーはキモリとジヨウトからの手持ちのニョロゾ。

○ケンタのポケモン

・バーン：ヒノアラシ↓バクフーン♂  
うっかりやな性格。もうか。

ケンタがポケモン世界にやって来た時から彼を見守って来たポケモンの一人。豪快な兄貴分。ケンタのエースと言えるメンバーであり、軽快なフットワークと強力な炎技で並み居るポケモンを蹴散らす。

・キツカー：バルキー↓サワムラー♂

やんちゃな性格。じゆうなん。

伸縮自在の両足で近距離から中距離の相手を仕留める切り込み隊長。また、訓練の末両腕のバネも伸ばせるようになり、意表を付いたパンチも打てる。基本的に常識人ポジだが、かわいい♀ポケモンを見ると一瞬でメロメロ状態になり、両足をハリケーンの如くくねらせアプローチする。女は蹴らない主義。バーンとは犬猿の仲で、目が合えばメンチを切り合う。

・ラーニヤ：ニューラ↓マニニューラ♀

きまぐれな性格。プレツシヤー。

気の強い姉御肌。軽い身のこなしによる連撃で相手に反撃の糸口を与えない。キツカーを顎で使っている。その他各地にニューラやヤミカラス等の多数の手下を張り巡らしており、驚異的な連絡網を持つ影の実力者。

・フォルル：コンパン↓モルフオン♀

おだやかな性格。いろめがね。

捕獲要員。優れた探索能力と粉技で相手を無力化する。

・スコツポ：スコルピ↓ドラピオン♂

いじつぱりな性格。スナイパー。

捕獲要員その2。視角のない頭と強力なカマ。ミサイルばりやみねうち等のテクニカルな技で対象を弱らす。

・ミップ：ミミロル↓ミミロップ♀  
さみしがりな性格。メロメロボディ。

サポート技やトリッキーな技で相手を翻弄する。ケンタが大好きでいつも甘えたがる。

・ハツピ：ラツキー↓ハピナス♀  
おだやかな性格。しぜんかいふく。

優しく包容力があるお母さんポジ。無尽蔵の体力と回復技で、他のポケモン達のスパリングの相手を駆っている他、オダマキ博士の助手も請け負っている。生傷の絶えない親子にハルカ共々目が離せない。

・ゴーゲ：ゴースト↓ゲンガー♂  
きまぐれな性格。ふゆう。

元は別のトレーナーのポケモンだったが、余りにも自由奔放できまぐれな性格の為に、扱いきれなくなり困っていたところを交換された。

人を驚かすのが好きだが、同時に楽しませることも好きなことを見抜いたケンタに、「見る人の度肝を抜くようなド派手なバトル」を提案され、その研究に励むようになる。

・グラロウ：ミズゴロウ♂  
ゆうやかな性格。げきりゆう。

ハルカ達新人トレーナーに選ばれず、がっかりしていた所にケンタと出会い彼についていくことに決める。バーンを兄貴分として慕っており、いつか彼のようなケンタのエースになりたいと思っている。

・バメオ：スバメ♂  
ひかえめな性格。こんじょう。

生まれつき強力な技を覚えていたが、臆病でバトルに向いていない

性格だった為にトレーナーから逃がされ、トウカの森でも他のスバメ達から除け者にされていた。ケンタ達と出会い、自分も彼らの様に強くなりたいと思つて仲間入りする。

・その他ボックス

オダメキ研究所やミシロタウン付近を好きに活動している。皆ケンタのことを信賴している。

## 時流れてとんぼがえり

ボオオオオオオ

どんな色にも染まらない街、ミシロタウン。その港に、ジヨウト地方・アサギシテイからの定期船が差し掛かるうとしていた。

「zzzzzzzz……」

定期船のデッキの上に立て掛けられたビーチチェア。その上に、黒と黄色の半袖のシャツに藍のカーゴパンツという出で立ちをした少年が、寝転んでいびきを立てていた。その傍らにはかざんポケモン、バクフーンが、体を丸めて同様に寝息を立てていた。到着を知らせる汽笛が鳴ったというのに、尚もいびきを掻いている二人を見かねた船員が、彼らを起こしに向かう。

「お客さん、お客さん。起きてください。もうすぐミシロに着きますよ」

「ぐうう……ふがつ」

船員に体を揺すられ、少年は目を覚まし気だるげに伸びをする。それに釣られて傍らのバクフーンもまた目を覚まし、大きなあくびをして伸びをする。

「んああ……あかん、寝すぎたわ。体バキバキやわこれ……」

「くああああ〜」

ふたりは並んで立ち上がり伸びをしつつ、デッキから見える近づいていくミシロの港を眺める。

「さあて、久しぶりの我が家やで、バーン。」

「バツフーンツ!!」

ミシロタウン・オダマキ家。

「フンフンフ〜ン♪」

上機嫌に鼻歌を歌い、テーブルに食器を並べる、モンスターボール



のプリントされた赤いバンドナがチャームポイントの少女、ハルカ。その足元では、彼女のパートナーポケモンであるアチャモが、主人に釣られて上機嫌に飛びはねている。

「ま・だかな〜？まっだかな〜♪おっ兄ちゃん、まっだかな〜♪」

「チャモチャモ〜♪」

ハルカの歌に相づちをうちながら、アチャモはちよこちよことあとを追う。

「あらあら、ハルカったら、そんなにお兄ちゃんが帰ってくるのが嬉しいの？」

「ハピハッピー」

そんな彼女の様子に、ハルカの母とその手伝いをしていたしあわせポケモン・ハピナスは、顔を綻ばす。

「うんっ！だってだって、ずっとずっと待つてたんだもん！」

ハルカは迷いなく即答する。優しくて面白くてポケモンをたくさん連れている凄腕のポケモントレーナー。そんな兄がハルカは大好きだった。

「こうしちゃいられない！わたしお父さん呼んでくるね！行くよチャモちゃん！」

「チャモ〜！」

そう言うと、ハルカとチャモは台所を小走りに、父のいるであろう林道へ向かった。

「あの子つたら……お兄ちゃんと入れ違いになるとは考えなかったのかしらっ？」

「ハピー……」

「全くもう、思い立ったらすぐ飛び出しちゃうところは父親似ね。」

「ハピハッピー」

そんな娘の様子に、ハルカの母とハピナスはやれやれといった具合に顔を合わせた。

101番道路。穏やかな気候で背の高い茂みと広葉樹の広がるそこは、距離は短いが野生のポケモンが多く住んでいた。

「ニヨロゾ、”バブル光線!”」

「ニヨロツ！」

白いニツト帽を被った少年の指示を受け、おたまポケモン・ニヨロゾが木に向けてバブル光線を放つ。泡の連撃は太い木の幹を大きく削った。

彼の名はユウキ。先週ジョウト地方から引越してきた彼は、パートナーであるニヨロゾとトレーニングをしていた。

「あ、ユウキ君!おっはよー!」

「あ、ハルカちゃん!おはよっ」

そこへ通りかかったハルカがユウキに挨拶をする。ユウキは彼女の元気に苦笑しながらも挨拶を返した。引越して来てから隣同士になった彼らは、お互いにポケモンを持っていることと、家同士のこともありすぐに仲良くなった。二人の傍らでは、ニヨロゾとチャモの二匹もお互いに挨拶をしている。

「ハルカちゃんは何処に行くの?」

「お父さんを迎えに行くの!今日お兄ちゃんが帰って来るんだ」

♪

「えーお兄さんが!」

ハルカから兄が帰って来ることを聞き、ユウキもまた顔を輝かす。彼はとある理由からハルカの兄とも以前からの知り合いであり、ユウキもまた彼のことを兄のように慕っていた。

「今日お兄ちゃんのお帰りパーティーなんだー!よかったらユウキ君もおいでよー!」

「えっ！いいの!？」

「だいじょーぶだよー！みんな歓迎するって！」

そう言いハルカは朗らかに笑う。彼女の思い切りのよさと前向きさにユウキは苦笑するも、不快な思いは一切なかった。それが彼女の長所でもある。

「だから早くお父さん迎えに行かなくちゃ！行こつ、ユウキ君!!」

「あ、まつ待ってよハルカちゃん！」

そうして二人は101番道路の林道を進んで行った。

「どこかな〜オダマキ博士……」

「う〜ん、いつものパターンだとそろそろ……」

「たっ たすけて くれーっ!!」

「……やっぱし」

「あ、はは……」

二人は声のした方向へと走っていく。そこには、探し主であるオダマキ博士が、かみつukiポケモン・ポチエナとその進化形グラエナの群れに木の上へと追い立てられていた。

「あ！二人とも!?!ちようどよかった助けて!!？」

「は、博士え!？」

「んもーお父さん!!なんで毎回そんなことになってるのよ!!」

ユウキとハルカの二人に気付いた博士は即刻助けを求める。その声で二人気付いたポチエナたちは博士から二人へと狙いを定めた。

「もうっ！後でお説教だからね!?!チャモっGOー!!」

「いつけえニョロー！」

二人の指示を受けてアチャモとニョロゾは動き出す。”かみつuki”にかかるポチエナをアチャモが”ひのこ”で牽制し、ニョロゾの”みずでっぽう”がポチエナを吹き飛ばす。2体は協力してポチエナの群れを対処しているが、流石に多勢に無勢であった。

「そ、そうだ！二人ともこれをつ！」

それを見た博士はカバンから2つのモンスターボールを取り出し二人に投げ渡す。ボールはそれぞれユウキとハルカがキャッチした。

「その中のポケモン達も加勢させるんだ！」

ハルカとユウキは顔を見合わせると、ボールを投げ中のポケモンを繰り出す。

「ガリヤ？」

「キヤモツ」

ボールから飛び出したのは、みずうおポケモン・ミズゴロウと、もとかけポケモン・キモリ。二匹はだいたいの状況は察しているのか、すぐに臨戦態勢に入った。

「キモリ、”はたく” 攻撃！ニヨロゾ、”バブルこうせん”！」

「チャモちゃん”ひのこ”！ミズゴロウ”みずでっぽう”！」

こうして二匹も加えた四匹はなかなかのコンビネーションによって徐々に巻き返していく。ポチエナ達も数で応戦するが、遠距離攻撃を持たない為に攻めあぐねていた。

「グルルルル……グアオオ!!」

すると群れのリーダーと思われるグラエナが鳴き声を上げ、ポチエナ達はその場を離れる。どうやら子分達に代わって自分が相手をするつもりらしい。進化形の登場に一同は緊張が走る。

「グオワアアア!!」

グラエナは”とおぼえ”を上げると一直線に”とっしん”する。それによりミズゴロウは撥ね飛ばされ、木に激突する。

「ミズゴロウ!？」

「ニヨロゾ!!」

ニヨロゾはバブルこうせんを放ちグラエナに命中する。グラエナは多少押し出されたものの、その場で持ちこたえるとニヨロゾへ飛びかかり”かみつく”。鋭い牙が食い込みニヨロゾは苦しむ。

「ニヨロゾ!？」

ニヨロゾを助けようと、キモリとアチャモが駆け寄るが、グラエナはニヨロゾを投げ捨て、その場で巨大な咆哮を上げる。

『グオオオオオオオン!!!』

”バークアウト”の衝撃により、小型なキモリとアチャモ、そしてユウキとハルカは吹き飛ばされる。耳鳴りのする中、グラエナが唸りながらゆつくりと近づいてくるのが見えた。ポケモン達も皆動けない。絶体絶命の状況で、ハルカは兄の姿を思い浮かべた。

「グルルルル……！」

「お、お兄ちゃん……！」

「グワアアアア!!!」

「助けてっ！お兄ちゃん!!」

”かえんぐるま!!”

ドンツ!!!

”かみくだこう”と飛びかかるグラエナを炎の弾が吹き飛ばす。炎は弾け、中からバクフーンの姿が現れ、グラエナの前に立ちふさがる。

「つたくもう、だからあれほど護衛くらいは付けろって言っとなのに。心配になって来てみたら案の定かい。」

ハルカは声のした方を見る。黒と黄色のシャツ。ジョウト弁混じりの言葉。そしてこのバクフーン。

「くくくツツ!!!お兄ちゃん!!!」

「よっ、ハルカ。色々話したいことはあるけど、まずは……」

「グオワアアアア!!!」

ケンタはグラエナへと視線を向ける。グラエナは邪魔をされたことに怒り、乱入者であるバクフーンのバーンを睨む。そして再び”おぼえ”を上げ、バクフーンを”かみくだく”為に牙を剥いて迫り……

”かわらわり”

その前にバーンの手刀がグラエナの額に降り降ろされた。効果抜群の一撃は、グラエナの脳を揺さぶり、そのまま意識を刈り取った。

目を回し倒れるボスの姿を見て、ポチエナ達は竦み上がり一目散に逃げ出した。

余りにも呆気なく終わった死闘に、誰もが唾然とする中、ケンタはバーンを労うと、腰のボールを取り出す。

「ハツピ、”いやしのはどう”だ。」

「ハツピ〜」

ボールから出てきたハピナス、ハツピの放ったいやしのはどうがアチャモ達に降りかかる。するとアチャモ達の傷が回復して行き、みな起き上がってトレーナーのもとに集まる。

「チャモちゃん！ミズゴロウ！」

「ニヨロゾ！キモリ！」

「よし、あとは……」

ケンタはアチャモたちが回復したのを確認するとハツピへ目配せする。それを受けたハツピはグラエナの元へ歩みより、同様にいやしのはどうをかけた。

「グ、グアア……」

「ごめんな、本当ならテリトリーに入った俺たちが悪いのに。これはせめてものお詫びだ。」

「ハツピ〜」

ふらふらと立ち上がるグラエナに、ハツピはお腹の卵を差し出す。

グラエナは困惑するが、やがて卵を啜えて林の奥へと走り去った。

「ふう、さて、これでもう……」

「お兄ちゃん!!!」

言うや否や、ハルカはケンタに飛び付く。ケンタは一瞬面食らうも、すぐにハルカを受け止めた。

「おっとっと、……ただいま、ハルカ」

「うんっ！お帰り、お兄ちゃん!!」

ホウエン

ココロふるいたてる、冒険の旅へ

「ほんまなんぼ言うたらわかんねん!!フィールドワーク行くんなら俺のボックスからでもええからせめて一匹はポケモン連れてけ言うてるやん!!何でわからんの!?!いつか命落とすでほんまあ!!!」

「はい、すみマセン……」

ミシロタウン、オダマキ邸庭先。そこで正座させられたオダマキ博士はジョウト地方から帰ってきたケンタに説教をされていた。

「お前らもっ！ポケモンの生息地に入る時は常に注意せなあかん!!ポケモンは人間の隣人やけど、同時に強力な存在やねん!!向き合い方を間違えたらケガですまんこともあるんやぞ!!」

「はい、ごめんなさい……」

ユウキとハルカもまた同様に正座させられている。ジョウト弁で怒鳴るケンタの迫力に二人とも縮みあがっており、ポケモン達も遠くから震えて見ている。

「まあまあ、ケンタもそのくらいにしてあげなさい。みんな今回のことはちゃんと反省してるだろうし。せつかく帰ってきたんだから、いつまでもカツカしてちやだめよ〜?」

「ハッピー〜」

様子を見ていた母とハッピーに咎められ、ケンタは再びハルカ達に視線を向ける。三人はビクツと肩を震わせ項垂れる。

「……反省した?」

「「しました」」

「もうしない?」

「「しません」」

「ちゃんと気を付ける?」

「「つけます」」

「……そっか、だったらよし！それじゃお腹すいたし家帰る。母さん晩ごはんになに〜？」

「ええ、今日はご馳走よく。ね、ハルカ？」

「え、えと…うんっ！お兄ちゃんの大好きなものいっぱい用意したんだから!!」

「そっか、そりや楽しみだ。じゃ、家入ろっか」

そう言ってケンタは笑ってハルカ達の手を取り立ち上がらせる。ハルカ達はホツと胸を撫で下ろし、玄関へと向かった。

「あ、そだ。ユウキ、センリさんにはこのことはちやくんと言つとけよ?」

「あ、あははは……はい」

項垂れるユウキをニヨロゾは肩を叩いて励ました。

「へえ〜、お兄ちゃんジョウト地方で伝説のポケモンのことを調べてたんだ！」

「そ、この2年くらいはジョウトの各地に存在する伝説のポケモンの伝承についての調査と、生息するポケモンの種類と傾向の調査だな。渦巻き島とスズの塔にも行ったぞ。生八つ橋とタンババーガーが美味しかった。」

「食べてばっかじゃないですか……」

ハルカ達の用意した豪華な夕食を食べながら、ケンタはジョウトで過ごしたことを語る。それをハルカはキラキラとした目で聴いていた。

「じゃあポケモンリーグには出なかったの？」

「ああ、ジムリーダーとか何人か知り合いは出来たけど、リーグには出ようと思わなかったな。バッチも集めなかったし」

「えー!?もつたいないよー。お兄ちゃんなら絶対に優勝できるの



に――！」

「そうですよ、ケンタさんすつごく強いじゃないですか！なのに何で……」

二人の疑問の声に、ケンタは困ったように笑う。

「ま、俺はのんびり漫遊しながら旅するのが性に合ってるからな……それに、昔はそんな余裕もなかったし……」

ポツンと呟かれたその言葉、それを言ったケンタと父の顔がどこか沈むのをハルカは感じた。二人ともいつも笑顔の家族だが、時々昔の話をしていると、顔に暗い影を落とすことがある。ハルカはそれが堪らなく嫌だった。

「くっッ!!……でも、でもでも！今は違うんでしょう？今はゆつくりのんびり旅できるんでしょう？」

「ん？ああ、そりやあまあ……」

それを聞いて、ハルカは椅子を立ち上がる。

「だったら、出ようよ！ポケモンリーグ!!わたしと、ユウキ君と、お兄ちゃんと！三人で!!」

ハルカの突然の言葉に、みな呆気にとられる。答えを迫るように体をのめらし見つめられ、ケンタは言葉を繋げる。

「いやいや、しかしだな、俺はともかく二人はまだトレーナー免許をもらったばかりだろう？」

「じゃあお兄ちゃんがわたしたちを鍛えてよ！三人で旅しながらジム巡りして、わたしたちを立派なトレーナーに鍛えて！」

「僕からもお願いします！」

そこでユウキからも声がかかる。思わぬ伏兵にケンタはまたしても啞然とする。

「ゆ、ユウキ？お前まで何を……」

「あの時、ケンタさんが助けてくれなかったらどうなっていたか……僕、強くなりたいです。ケンタさんや父さんみたいにみんなを守れるくらいに強くなりたいです！だから、お願いします！」

「僕／わたしたちを強くしてください!!」

二人は打ち合わせでもしていたかのように、言葉を揃えて頭を下げ

る。そして、未だ啞然とするケンタに真剣な目で訴えかけた。ケンタは二人の目を見つめると、やがて髪を掻いてため息を溢した。

「……はあ、わかったよ。ここまで言われたんじゃない。どーせ今度はハウエンで仕事するつもりだったんだし、ジム巡りしながらでもかまわんだろ。」

その言葉に二人は目を輝かす。ケンタはニコニコと様子を眺める父に視線を向けた。

「と、まあそう言う訳で。いいよな、父さん？」

「もちろん、むしろ大賛成さ。君らは若いんだ、思うままにしたらい。僕は応援しているよ。」

「ーッ!!じゃあ…!!」

「いよし!それじゃ出るぞポケモンリーグ!!目指すはハウエンチャンピオンだ!!」

「「お~~~~ッ!!!」」

夜も更けた深夜、ハルカが明日への思いに胸膨らませベッドでアチャモと寝息を立てるなか、ケンタとオダマキの二人はソファアで向かい合い語らっていた。

「ごめんよ父さん、勝手に決めちゃって。俺は父さんの研究の手伝いで旅をしてるのに…」

「いいんだ。むしろ嬉しいくらいさ。これまでもケンタの送ってくれたデータののおかげで随分と助かってるんだ。君は君の思うままに人生を生きればいいんだよ。」

「……ありがとう、父さん」

ブリーの実のジュースをカップに注ぎ、オダマキはケンタに差し出す。舌に残る濃厚な甘味に苦笑を洩らすと、オダマキが口を開いた。

「手掛かりは見つかったかい？」

それは、二人だけの秘密。七年前、意識を取り戻した健太が幼いな

がらも必死に訴えかけ、そしてオダマキが決して誰にも話してはならないと約束した、ハルカにも、妻にも話したことの無い、二人の抱えた秘密だった。

「いや、ぜんぜん。人欠片もなし。ウバメの祠やハテノ村にも行ってみたけど……」

「……………帰りたいかい？元の世界に」

オダマキのかけた言葉に、ケンタは言葉無く、顔を曇らせ沈黙する。部屋に沈黙が降りる。やがて、健太は絞り出すように言葉に出した。

「……………正直、わからないや。」

そうしてポツリポツリと、選ぶように言葉を続ける。

「父さんや母さん、ハルカのこととは本当に家族だと思ってる。事故にあつて、この世界に来て、父さんや、ポケモン達に出会って、みんな本当に、本当に大切な家族なんだ……………けど、」

『健太!!健太あああああああ!!!』

「今でもね、頭に、浮かぶんだ……………俺に手を伸ばす向こうの父さんの姿が、家で待ってた母さんが……………頭に……………浮かぶんだ」

悲痛に叫ぶ父の顔が、自分を送り出した母の顔が、幾度となく頭をよぎる。はじめは、大好きなポケモンの世界に来れたこと、空想の存在であつたポケモンとふれあえたことを純粹に喜んだ。

だが、やがて気づいたのだ。"ここには父と母はいない"と。そして"自分はこの世界でただ独りなのだ"と、嫌でも実感した。

「忘れられやしない。忘れたくない。忘れるのが怖い。」

夢にうなされたことも幾度となくあつた。一時期この世の全てを拒絶した。

だが、オダマキが、オダマキの妻が、ハルカが、ポケモン達が、そんな自分に暖かく寄り添ってくれた。絶望に沈んでいた自分を、家族として受け入れてくれた。いつしか、心を覆う絶望と孤独は、消えて

なくなっていた。自分は独りではないと、そう思えるようになった。

「……けど、それ以上に、俺は知りたい。なぜ俺がこの世界に来たのか。どうして俺だったのか、俺はそれが知りたいんだ。」

「……………そうか」

息子の<sup>ケンタ</sup>独白を、ゆっくりと、しっかりと、一言一句残さず飲み込み、オダマキもまた自身の胸の内を語った。

「正直に言うよ。僕も、ケンタのことは本当の息子だと思っている。離れたくはない。ずっと一緒にいてほしい。母さんも、ハルカも、みんなそう言うと思うよ。」

はじめは突拍子もないことだと思った。自分が事故にあつて異世界から来て、そこではポケモンがフィクションの存在であり、自分達がゲームのキャラクターだったなど、到底信じられないことだった。

だが、彼の語ったオーキド博士をはじめとした、ポケモン関係の著名人の名前とポケモン学会でも一部しか知らないような伝説のポケモンの名前。そして、彼の持っていた冊子の中を見て、それが真実なのだと確信した。

未だ研究の浅いアローラ地方に生息する固有種のポケモンの名前、タイプ、特性、進化系列。それだけではなく、覚える技やそのレベル、果てはその糸口すらまともに掴めていない、そのポケモンの持つポテンシャルや卵グループなどが、明確に数値化され記されていたのだ。

これを公開すれば世界がひっくり返る、そう確信した。

だが、それだけだ。彼自身は何の罪もない、ただの幼い子供だ。命の危ない重態を負いながら、見知らぬ世界に独り放り出され、訳も分からず震えているただの子供だ。

そんな子供を自分たちの勝手なエゴに巻き込むようなことは、オダマキには到底できなかった。そして、彼は自分が守らねばならないと、そう心に誓った。

彼を家に迎え入れることにした際、妻と娘にはポケモンの生息地で瀕死の重態で倒れているのを発見し、引き取る親も戸籍もないと説明

した。当時からやんちゃだった幼い娘は新しい兄をすぐに受け入れ、妻もそんな彼の境遇を嘆き、本当の息子のように接した。そして、その努力も実り、彼は明るい笑顔を見せるようになり、立派に成長してくれた。そしてそう思えたとき、とつくに自分たちは本当の家族になつていた。

「だけど、これだけは覚えていてほしい。僕は何があろうと君の味方だ。君が真実を知った時、どんな選択をしたとしても、僕は絶対にそれを否定はしない。」

だからこそ、自分は彼を見守ろうと決めた。旅の末、彼が元の世界へと帰ってしまったとしても、自分は笑顔で見送ろう。そう心に決めていた。

「……父さん」

「頑張りなさい、君は僕の自慢の息子だ。ハルカ達を、頼んだよ。」

「……ああ、わかった。任せてくれ。」

けれど、そんな立派になった息子を見ると、やっぱりどうしようもなく……

(寂しくなつちやうなあゝ……)

「ユウキくんっ！こつちこつちー！」

「わかつてるよーハルカちゃんっ」

ミシロから101番道路へと続く道、そこで待っていたオダマキ一家はユウキを出迎える。

「ユウキ君、そしてハルカ。準備は出来たのかい？」

「はいっ！」「バッチリだよー！」

オダマキ博士の問い掛けに、二人は元気よく答える。オダマキはその答えに満足の笑みを浮かべてうなずいた。

「よろしい！二人の旅立ちを記念して、僕からプレゼントを贈ろうと

思うんだ。」

そう言つてオダマキ博士は、二人に赤い楕円形の機械を手渡す。

「これはポケモン図鑑、ホウエン地方のポケモンのデータが記録されていて、さらに出会ったポケモンのデータを自動で更新するハイテク図鑑だ。因みに、中のデータはケンタの集めた情報をもとにしていくよ。」

「へえ〜！すごいねお兄ちゃん！」

「いやあ、それほどでもね」

「そして、ユウキ君。君にはもうひとつ贈るものがあるんだ。」

すると、ユウキの背中をよじ登り、キモリがユウキの頭に飛び付いた。

「キヤモツ！」

「うわっ！キ、キモリ!?!」

驚くユウキにキモリは頬をこすりつける。

「あの戦いの後、君のことをいたく気に入ったみたいでね、どうか連れて行ってやってくれないかい？」

「いいんですか!?!」

「ああ、君という方がキモリも幸せそうだ」

オダマキ博士の言葉にユウキは満面の笑みを浮かべ、キモリを抱えて正面から向き合った。

「よろしくな、キモリ！」

「キヤモ！」

「えー！いなーユウキ君〜」

「ハルカちゃんはおチャモをもらったんだろ？」

羨ましがるハルカにユウキが指摘する。見れば彼女の足元でアチャモのチャモがピョコピョコと抗議していた。

「でもユウキ君にはニョロゾがいたじゃない！あつ、じゃあミズゴロウは!?お父さん、わたしミズゴロウを連れてつてもいい!?!」

「それなんだがね……」

「ゴリョ」

オダマキ博士は苦笑してミスゴロウのボールを取り出す。出てきたミスゴロウはピョンと飛び出し、ケンタの前へと降り立った。

「どうやらミスゴロウはケンタに連れて行ってほしい様なんだ」

「俺に？」「お兄ちゃんに？」

「ゴリヨ、ゴリヨゴリヨ！」

そうしてミスゴロウはケンタに胸の内を語りだす。

「ゴリヨ、ゴリヨリヨ。ゴリヨゴリヨゴリヨ、ゴリヨゴリヨゴリヨ。ゴリヨゴ、ゴリヨゴ！ゴリヨゴリヨゴリヨ！！」

「ははは、何言つとんのかわつかんねーや」

ガビーン ！？Σ（。ロ。；）

「けど、わかるぜ。強くなりたいたんだろ？」

そう言つて、ケンタはミスゴロウの瞳をじつと見つめる。見つめられたミスゴロウもまた、真剣な眼差しでケンタを見つめかえした。

あの時、グラエナになすすべなく吹き飛ばされ、そのグラエナを一撃で倒したバーンの姿。それを見て、自分が余りにも情けなかった。悔しくて、羨ましくて堪らなかった。

けれど、それ以上に彼らがとてもかっこよかった。彼らのように強くなりたいと、心から思ったのだ。

「いいぜ、行こう！」

「ーッ！ゴリヨ！！」

ケンタの答えに、ミスゴロウは歓喜の声をあげる。いつか自分も、ケンタの傍らに立って、一緒に戦いたい。そして、みんなを守るんだ。その思いを胸に、ミスゴロウはケンタへ抱きついた。

「ちえく、じゃあしようがないっか。わたしもポケモンゲットしなきゃね！」

「そうそう、その意気だハルカ。」

ハルカは少し残念に思うも、ミスゴロウの意識を汲み取り自分も新たな出会いに意気込む。見ればチャモも、彼女の足元で小さな胸を張って意気込んだでいた。

「いよっしーそれじゃいくぞー！まずはトウカシテイだ！ハウエンリー

グへの旅！しゅっぱーっ！！  
「おーっ！！」

こうして、ケンタ、ユウキ、ハルカの三人による、ホウエンリーグへの旅が始まった。



## 102番道路 シンクロする思い

「チャモちゃん、”ひのこ”よー！」

「キモリ、”はたく”だ！」

「グラロウ、”みずでっぼう”！」

現在102番道路。ケンタたちは野生のポケモンとのバトルでポケモンたちのレベル上げに励んでいた。ケンタの新しい仲間、グラロウと名付けられたミスゴロウのみずでっぼうを受け、ポチエナは目を回して倒れる。それを見たグラロウは喜びケンタへ駆け寄った。

「ゴリョッ、ゴリョゴリョ!!」

「ああ、よくやったな。偉いぞグラロウ。」

ケンタは、駆け寄るグラロウを抱き留めその頭をなでる。ひんやりとした感触が心地よく、グラロウも気持ちよさそうになでられていた。

「やったー！勝ったー！」

「チャモー！」

一方ハルカも、ポチエナが目を回して倒れるのを見てチャモを抱き上げぴよんぴよんとび跳ねる。チャモもまた全身で喜びを表していた。

「こらこらハルカ。嬉しいのはわかるけど、先にチャモの回復」

「あつ！そっか！ごめんねチャモちゃん」

ハルカはチャモを地面に降ろすとカバンを弄りポケモン用傷薬（ゲームで言うところのきずぐすり）を探す。その間に、ケンタは倒れているポチエナたちにオレンの実を与えていた。

「大丈夫かい？付き合ってくれてあんがとよ。」

「「ぎやうー！」」

きのみを平らげやぶへ走り去るポチエナたちを見送ると、ケンタはポケモン図鑑を取り出しデータを確認する。

「えーと、ポチエナ、ケムツソ、ハスボー、アメタマ及びその進化系……大まかな分布に変化はない、か。」

「それがフィールドワークなの？」

「そ、こうして各生息地で出会ったポケモンを記録したり、ゲットして研究所に転送して、調査してもらってからまた放したりって感じだな。」

「へえ〜」

興味深げに図鑑を覗きこむハルカに対し、ケンタは大まかに自分の仕事を説明する。そこへ同様にキモリのバトルを終えたユウキが歩み寄る。

「キモリ達もだいぶバトルに慣れましたね。」

「だな。よし、ぼちぼちトウカへ繰り出そうか。師匠にも挨拶しておこう。」

「そうですね」

「はい！」

そうして、ケンタ一行は小休止を挟んでからトウカシティへと向かっていった。

自然と人が触れ合う街、トウカシティ。緑に囲まれるのどかな時間の流れる街である。同時に、ポケモントレーナーの登竜門、ポケモンジムのある街としても有名だった。

「なかなかいい勝負だったよ。またいつでも挑戦にきなさい。成長した君とポケモンたちを楽しみにしているよ。」

「はい！ありがとうございます、センリさん！」

そう言ってチャレンジャーを見送る男。彼こそが、強さを追い求める男・トウカジムのジムリーダー、センリである。

「お久しぶりです、師匠。」

「ん？……おお！ケンタじゃないか！それに、ユウキにハルカちゃんも！」

掛けられた懐かしい声に振り向くと、学友であるオダマキの息子にして自分の弟子であるケンタ、そしてその妹のハルカと自身の息子の姿があった。

「こんにちはーセンリおじさん！」

「お久しぶりです父さん。」

「(お、おじさん……) や、やあ。よく来たねみんな。立ち話も何だし、中で話そうか……」

ハルカの何気ないおじさんの言葉に軽くショックを受けつつも、センリはケンタたちをジムに招き入れた。

「……ハルカ、今度から師匠におじさんは止めようか」

「?? わかった」

「……さて。改めて、ようこそトウカジムへ。オダマキから話は聞いているよ。」

「はい、まずは二人を連れて各地のジムを回ってみようとおもってます。」

道場造りのジムの中、改めてセンリはケンタたちに向き直る。オダマキからの伝手で、かつて住んでいたジョウトの地で鍛えた弟子と、自分の息子たちがリーグを目指して旅立ったことを電話で聞いたときはなかなか感傷深いものがあった。

「なるほど、君がついているならユウキたちも安心だろう。なにせ私とオダマキのお墨付きだ。二人とも、彼からトレーナーについてしっかり学ぶんだぞ?」

「はい!!」

ユウキとハルカの返事を聞いてセンリはうんうんとうなずく。この短期間でしっかりと信頼を築いているようだ。

「それで、この度……」

「リーダー、少しよろしいでしょうか?」

ケンタが何か言いかけたところに、ジムトレーナーの一人がセンリに話しかける。

「うん? どうしたのかね?」

「ええ、それが……」

「ミツル君大丈夫かい？」

「キツかったら行つてね」

「は、はい。平気です。」

「あ、ミツル君、その葉っぱ触っちゃだめだよ？かぶれるから」

「あ、はい。わかりました」

再び場所は移り、102番道路の林道。ケンタたちはトウカジムに訪ねてきた緑髪の少年、ミツルを連れて森の中を散策していた。

「それで、ミツル君。具体的にどんなポケモンが欲しいとかはあるの？」

「え？ああいやっ、その、とくには……」

今回ミツルが訪ねてきたわけは、今日から親戚の家に引っ越すことになったものの、一人では寂しいからポケモンを連れていきたいと思い、それでセンリに相談にきたといういきさつだった。ジムリーダーであるセンリはトウカの顔役でもあり、住民からポケモン関連の相談を受けることも珍しくない。

『みんな、せっかくだからミツル君のゲットの手伝いをしてやってくれないか？』

そうセンリに頼まれて、ケンタ一行はミツルをつれて彼のパートナーになるポケモンを探しているのだ。

「この辺りにはどんなポケモンが生息してるんですか？」

「そうだな……ポチエナ、ジグザグマ、ケムツソ、タネボー。水辺だとヘイガニ、ハスボー、マリル……ああ、珍しいとこだとラルトスなんてのもいるな。」

「へえ〜」

「あの、その……ラルトスって、どんなポケモンですか？」

ケンタの並べた名前の中で、ミツルが興味をわいたのかラルトスについて尋ねる。

「きもちポケモン　ラルトス。人間やポケモンの感情を感じ取ること

ができるポケモンだ。滅多に人前には現れないが、穏やかな心の持ち主には近づいてくるって話だ。」

「ラル〜」

「そうそうこんな感じの……うえ？」

ケンタがラルトスについて説明するなか、フキの茂みから現れたのは、見まごうことないラルトスだった。

「け、ケンタさん……!」

「ああ、真正正銘ラルトスだ……」

まさかの来訪者にユウキとケンタは面食らい、当のラルトスはそんな一行の様子にコテンと首をかしげる。そんな中、唯一ハルカは興奮した様子でミツルの肩を揺さぶる。

「ちや、チャンスだよミツル君! ほらほら、ゲットゲット!!」

「え? あっはい!」

ハルカの呼びかけで我に返ったミツルは、慌ててモンスターボールを取り出そうとするが、手が滑ってこぼれ落としてしまう。

「ラルル」

「あっ」

ミツルは慌てて拾おうとするが、それを見たラルトスは「ねんりき」でボールを浮かび上げらせ、ミツルの目の前に差し出した。

「ラル」

「あ、ありがとう。」

ミツルは恐る恐るボールを受け取り、それをみていたケンタは彼に声をかける。

「ミツル君。さつきも言ったが、ラルトスは相手の感情を読み取る。君の思いをしっかりとらめて、その子に伝えるんだ。」

「え? ……は、はいっ!」

(僕の……僕の思い!)

ミツルはボールを握りしめ、まっすぐにラルトスを見つめる。そしてラルトスもまた、ミツルの目を真っ直ぐに見つめ返した。ミツルはゆっくりと歩み寄り、ボールを目の前に差し出した。

「……僕と、僕と一緒に来てくれますか?」

「……ラルツ」

ラルトスはボールのスイッチに触れることで答え、そしてボールの中へと納まった。

「こ……これって……!」

「ああ、正真正銘のゲットだ。」

「や、やった……やったあ!!僕の、僕のポケモンだあ!!」

ミツルは感動を噛みしめんばかりに喜んで飛び上がった。

「やったなミツル!」

「おめでとうミツル君!」

「ありがとうございます!みなさんのおかげです!」

「何言ってるんだ。君の思いが通じたからラルトスがゲットできたんだ。君のお手柄だよ。」

「ケンタさん……」

「おめでとう、ミツル君。」

「……ッ!!……はいつ!!」

その時、突如凄まじいスピードで伸びた長いひも状の何かが、ミツルの手からボールをかすめ取った。

「えっ!?!」

「な、何!?!」

「ぼ、僕のボールが!?!」

ユウキ達が騒然とする中、ただ一人ケンタは、宙を漂う赤いギザギザを見据えていた。

## へんげんじぎいの襲撃者

sideミツル

なんで!?!どうして!?!一体何が!?!そんな思いが次々溢れて頭がぐちゃぐちゃになる。

僕はじめてのポケモン、ケンタさんたちのおかげでゲットできた僕のリルトス。そのモンスターボールが突然消えてしまった。

「け、ケンタさん!!ボールが、リルトスの入ったボールが!?!」

「落ち着けミツル君。ほら、あそこ見てみな」

ケンタさんの指差した先を見て思わず目を見開く。僕の手から消えたモンスターボール、そしてそのそばで赤いギザギザが宙に浮いていたのだ。

「えっ……………なにあれ?！」

「ボールと赤いギザギザが宙に浮いてる…………」

どうやら驚いているのは僕だけじゃないみたいです。ユウキ君やハルカちゃんも唾然とその光景を眺めている。一方で、ケンタさんだけはその光景を冷静に眺めていた。

「よく見てな。今に正体がわかる」

そう言われてその赤いギザギザをじっお見つめる。すると、だんだんギザギザの回りに何かが浮かび上がってきた。

薄緑色の体にギザギザの頭、クルクルとカールしたしっぽにボールに伸びる長い舌。どうやらあの赤いギザギザはおなかの模様で、僕の手からボールを奪ったのはあの長い舌だったらしい。あれって、もしかしてポケモン!?!

「ア~~~~、ンム」

「「あ~~~~っ!!?」」

うええええええ!!?ぼ、ボールが、ボールが食べられたー!!?

「けけけケンタさー!ーん!!ぼぼぼボールがつ、ボールが変なポケモン(?!?)にいいいい!!?」

「うおっ!ちよ!?!大丈夫、大丈夫だから!飲み込みはしないって!」

「レオオ〜ッ? ペツ!!」

ケンタさんの言った通り、そのポケモンはモンスターボールを口に入れるも、変な顔をしたかと思うとそのままボールを吐き出した。つて!?

「ボールが!？」

「あつ?! ミツル君!？」

考える間もなく、気が付けば走りだしていた。ボール、ラルトスの入ったボール! 僕のパートナー!

「うわあああああああああああああ!!」

無我夢中で飛び込んで、ボールをキャッチする。草むらに突っ込んで全身草まみれになっても全然気にならない。ああ、よかった……! 僕のラルトス!

「ミツルくん!」

「大丈夫かー!？」

後ろからハルカちゃん達の声が出たと思うと、僕は抱き起こされる。振り向くとケンタさんの顔があった。



「ケンタさん……」

「つたく、むちやしおってからに。でもま、カツコよかったぜ?」


そう言つてケンタさんは僕の頭を軽く叩く。何だか照れ臭くなつて僕は顔を俯けた。

「あ、そういえばさっきのポケモンは……」

そう思い辺りを見回すと、さっきのポケモンは木に張り付いて器用によじ登っていた。

「ハルカ、鑑鑑」

「え? あっうん!」

ハルカちゃんは慌ててカバンから機械を取り出してあのポケモンへ向けた。あれがポケモン鑑なのかな?

『カクレオン いろへんげポケモン

ノーマルタイプ

体の色を周りの風景に同化させて姿を消せるが、お腹の模様だけは同化できない。



長い舌を素早く伸ばしてエサを食べる。』

「おそらく、モンスターボールを木の实か何かと勘違いしたんだろう。口に入れて食べられないとわかって吐き出したんだな。」

なるほど、そういうことだったのか。なんてことを考えてたら、ボールが開いてラルトスが飛び出してきた。

「ら、ラルトス？」

「ラルツラルー！」

どうやらラルトスはカクレオンに怒っているようだ。それはそうか。いきなり飲み込まれたんだし。

「ふむ、ミツル君。この際だ、ゲットのついでにバトルも経験してみないか？」

「ば、バトル…ですか？」

ケンタさんの提案に正直迷ってしまう。バトル…バトルかあ……

「少なくとも、君の相棒はやる気みたいだぜ？」

「ラル〜！」

見れば、ラルトスは両手を振り上げやる気を表している。かわいい

「……わかりました。ちよつと怖いけど、やってみます！」

「よっしや、その意気だ。」

「でもケンタさん、カクレオンは木の上ですよ？逃げられちゃうんじゃない……」

「ま、見てなって。お膳立てくらいはしてやるよ。」

そう言つてケンタさんはベルトに着けたボールを取り出して放り投げる。すると中から紫色のガのようなポケモンが現れた。

「これは……モルフォンか？」

「あ、フォルルちゃんだ！やっほー」

『モルフォン どくがポケモン むし どくタイプ』

コンパンの進化系

羽の鱗粉は様々な種類の毒の成分を含む 夜行性で夜の街灯に集まる小さな虫をエサにしている』

ユウキ君のポケモン図鑑からそんな説明が聞こえてくる。なんか

さらつと危険なこと言つてた気がするんですけど……?」

「フォルル、”ねんりき”。あいつを地面に下ろしてくれ。」

ケンタさんの指示を受けたフォルルというニックネームのモルフオンは、ヒラヒラと舞うと目が淡い光を放つ。するとカクレオンにも同様の光がまわりついて、宙に浮かばす。カクレオンはじたばたともがくが、そのままべしやりと地面に落ちた。

「レ、レオ……」

「おいカクレオン。ちよつとこの二人とバトルしてやってくれ。お礼に木の実を食わせてやるよ。」

「フォ……」

起き上がったカクレオンはいそいそと逃げようとするが、辺りを舞うフォルル……ちゃんに気圧されて、ケンタさんの言葉が聞こえたのか、渋々といった様子で僕達の方へ向きなおる。

「ミツル君、ちよつと……ゴシヨゴシヨゴシヨ」

「え?……はい、はい……わ、わかりました、やってみます!」

ケンタさんに耳打ちされた内容を忘れないように反芻する。よし、やるぞ!

「いくよラルトス!」

「ラルー!」



sideケンタ

いや、おかしくない?俺主人公だよね?何で一人称がゲストの後なの?

「て、そんなこと考えてる場合じゃないわ」

ミツル君とラルトスの初バトル。相手のカクレオンは逃げられないようにフォルルが睨みを効かせてるけど、さて、どうなるか。

「フォル」(逃げたら毒まぶすわよ)

「レオ……」(わかつちよるばい。はあ、せがらしか)

カクレオンはやれやれといった様子で舌をペロ……と伸ばすと、そのままラルトスに勢いよく伸ばす。

「したでなめる」だ！ラルトスには効果抜群だ！」

「大丈夫、見てな。」

「ら、ラルトス、”テレポート”！」

ミツル君の指示を受け、ラルトスは一瞬にしてその場から消える。結果カクレオンの攻撃は空振りに終わり、驚いたカクレオンは辺りをキョロキョロと見回す。

「今だ、”ねんりき”！」

「レオツ!？」

そこへカクレオンの背後へと転移していたラルトスのねんりきがカクレオンを吹き飛ばす。ゲームじゃただの移動技だったテレポートも、実戦ではこんなふうに使うこともできるんだ。

「レ、レオー！」

「ラルトス、もう一度”テレポート”！」

起き上がったカクレオンは再び舌を伸ばすが、ラルトスは再びテレポートで回避する。カクレオンは何度も舌を伸ばすが、それでも全て空振りに終わった。

「レオー！」（ああーもうっ！チヨロチヨロチヨロチヨロうっとおしかー！）

カクレオンは大きく舌を振り上げると、そのままなぎ払うように振り払う。しかし、ラルトスはテレポートで難なくかわし、再びカクレオンの背後を取った。

「今だー！」

ラルトスは再びねんりきを放とうとするが、突如カクレオンのカールしたしっぽが伸びてラルトスを撃ち抜いた。

「ああっ!?!ラルトス！」

「レオッン！」（アホたれっ、伸びるのは舌だけじゃないばい！）

「うわっ、やられちゃった!?!」

「”だましようち”、あくタイプの技だ。効果は抜群だぞ」

「ら、ラルトス、大丈夫!?!」

「ラ、ル……！」

ラルトスはふらつきながらもなんとか立ち上がり、ミツル君はほっ

と胸を撫で下ろす。

「よ、よし！反撃だ！ねんりき！」

「ラルツ！」

ラルトスは再びねんりきを向けるが、カクレオンはそれを難なく振り払ってしまふ。これは、もしや……

「そ、そんな……！」

「ラルっ!？」

「レオン」

二人の狼狽する姿に、カクレオンは勝ち誇りながらゆっくと近づいて行く。ゆらゆらと舌を揺らして余裕そのものだ。対するミツル君は完全にガクブルだ。今ので戦意が折れかけてる。

「あ、うあ……も、もうダメだ……」

「諦めるなミツル君！まだラルトスは諦めてないぞ！」

ミツル君ははつとしてラルトスを見る。ダメージを受けてふらふらになりながらも、その闘志はまだ消えていなかった。

「ラルトス……！で、でも」

「トレーナーが投げたらバトルは終わりだ！自分のポケモンを信じて、ドンと構える……それがトレーナーの役目だ。」

「ポケモンを、信じて……」

「レオン!!」(これでしまいばい!!)

カクレオンはとどめを刺そうとラルトスにとびかかる。

「ラルトス、頑張れええええええええええええええええ!!」

『R a !!』

「レオツ?!レオオオオオオオオオ?!」

ミツル君の声援を受けたラルトスは、ソプラノボイスの衝撃波を放ち、それを正面から食らったカクレオンは大きく吹き飛ばされる。

「あれは!？」

「“チャームボイス”だ！」

「レ、レオくん……(き、きつかく……)」

そのままカクレオンは目を回して倒れた。

「ミツル君！」

「え？わわ!!」

ミツル君にからのモンスターボールを投げると、ミツル君は慌てながらもキヤツチする。片手で投げるモーションを見せると、それで見せたのかボールを構える。

「いつけええええ!!」

投げたボールは弧を描きカクレオンにヒット、カクレオンはボールに収まる。

ウイン ウイン ウイン……カチツ☆

そして、ボールが完全に閉まる音が響いた。

「……やった、やった!やった!やった!ラルトスやったよ!僕ら勝ったんだああああ!!」

「ラルララー!!」

ミツル君とラルトスはともに抱き合い喜びを分かち合っている。いいね青春だね

「すごいミツル君!!はじめてなのにポケモン二匹もゲットなんて!?!」

「けど、なんでカクレオンにねんりきが効かなくなったんだろう?」

「ああ、それは『へんげんじぎい』だな。」

「へんげんじぎい?」

「そ。カクレオンの特性のひとつでな、自分の出したわざと同じタイプに変化するってものなんだ。さっきのも、あくタイプのだましうちを使ったことであくタイプに変化してたんだ。それでエスパー技のねんりきが効かなくなつて、フェアリー技のチャームボイスが効果抜群になったつてわけだな。かなり珍しい特性なんだぞ?」

「へえへえ」

「ケンタさん!ありがとうございます!!僕!僕!!」

「わかつてる、わかつてるよ。よく頑張つたな、君も、ラルトスも。」  
「へへへ……はい!!」

「いよっし、そんじゃ、帰るとしますか」

「おー!!」「お、おへへ!／／／／」

再びトウカジム。オレたちはミツル君の見送りに来ていた。

「皆さん、本当に、本当にありがとうございます。ラルトスとカクレオンを捕まえることができたのはみなさんのおかげです！」

「ふっふーん、どういたしまして！」

「ハルカちゃんはなにもしてないだろ？」

「そーそー。ミツル君が頑張ったからさな」

「あー!?二人ともひっどーい!!」

「あははは！」

俺たちのやり取りを見てミツル君も笑い出す。そこにはじめのおどどとした雰囲気はなく、キラキラと輝いていた。

「ラルトス、カクレオン。ミツル君を頼んだぞ。」

「ラルー！」（おまかせを！）

「レオーン」（仕方なか。面倒見ちやるばい）

「僕、ラルトスたちと精いっぱいがんばってみます！みなさんも頑張ってください！」

「おう！」「またねっミツル君！」

「頑張れよ、君にはポケモンたちがついてる」

「はいっ!!」

そうしてミツル君はトラックに乗り込み、トウカシティを後にした。

「……ふむ、なかなか将来有望な子だったね」

「ええ、ハルカたちのいいライバルになると思いますよ。」

本当、今年のホウエンの新人たちは豊作だねえ

「そういえば、さっき何か私に言いかけてたが、何だったんだい？」

「ああ、そうそう」

こればかりはちゃんと伝えとかないといかんね。俺はセンリさんに向き直り、正面から宣言する。

「師匠……いや、センリさん。俺と、本気でジム戦をしてください。」

## トウカジム センリVSケンタ

「これより、チャレンジャー・ケンタとジムリーダー・センリによる、トウカジム、ジムバトルを開始します！」

トウカジム、ジムリーダーの間。和の心漂う木造のバトルフィールドにて、二人のトレーナーが向かい合う。壁際に備え付けられたベンチでは、ハルカとユウキ、見学を言い付けられたグラロウ。そして、トウカジム所属のジムトレーナー達が、二人のバトルを見学していた。

「お兄ちゃん頑張つてー！」

「ゴリョゴリョー！」

「ルールは、使用ポケモン2体によるシングルバトル。尚、ポケモンの交代はチャレンジャーのみ認められます。」

「……今思うと、私はこの瞬間をどこかで待ち望んでいたのかもしれないな。君を鍛えることにしたあの時から」

「そう言ってもらえると光栄ですよ。本当に……」

二人は懐かしみ過去を思い出す。学生時代からの親友であるオダマキが義理の息子として突然紹介してきた少年。初めは暗く沈んだ雰囲気を漂わせていたが、いつしか年相応の明るさ、そして並のトレーナー顔負けにポケモン達との信頼と知識を身につけていたのが印象的だった。

そしてオダマキの推薦とはいえ、単身ハウエンからジョウトまで弟子入りに乗り込んで来た時には、その行動力とバイタリテイにオダマキの色濃い影響と面影を感じて苦笑した。

「色々と言りたいところだが、今はジム戦」

「後はバトルで、ということですか」

「そうして二人は静かにボールを構える。」

「引率としてカッコいいとこ見してやりたいものでね。勝ちにいかせてもらいます。」

「ふっ、いいだろう。こい！」

ほぼ同時にボールが投げられ、それぞれの一番手が姿を現す。

「ギャツホオオオオオオ!!」「マニユツ」

雄叫びを上げて現れたのは、あばれザルポケモン、ヤルキモノ。鼻息荒く足踏みをし、世話しなく騒ぎ立てている。対して、ケンタが練り出したのは、かぎづめポケモン、マニユーラ。ヤルキモノとは対照的に、爪を弄り冷酷な眼差しで敵を見据える。

「ラーニヤ、今回はセンリさんとのジム戦だ。気合い入れろよ！」

「マニユ、マニユマニユ」(わかつてるわよ)

マニユーラのラーニヤは、ケンタに向けて流し目で鼻息を鳴らし、「ラーニヤちゃん頑張れー!」と、声援を送るハルカにはにこやかに手を振った。その対応の違いにケンタは若干気落ちするが、すぐに切り替え相手を見据える。

「試合 開始い!!」

「ギャツホオオオオオ!!」

先に動いたのはヤルキモノだった。人間の10倍のテンポで鼓動する心臓により産み出されるバイタリティをフルに解き放ち、ラーニヤへと一直線に突進する。

そしてその勢いのままに”アームハンマー”をリアットのフォームで振り抜き――

パアンツ!!

直前に渴いた炸裂音によって遮断される。眼下にまで迫った目の前で放たれた”ねこだまし”、それによりヤルキモノの思考は揺らされバランスを崩す。そこへすかさず”こおりのつぶて”が叩き込まれ、ヤルキモノは吹きとばされる。

「まだいけるよな、ヤルキモノ。」

「ゴオオホオオオ!!」

センリの呼び掛けを受け、ヤルキモノは飛び起きると溢れる衝動のままに再びラーニヤへと突撃する。

「近づけるな!」



「シヤツ！」

ラーニヤは近づけまいと、再びこおりのつぶての散弾を放つ。

「構うな蹴散らせ！」

「ゴオホオオオオッ!!」

しかし、ヤルキモノは知ったことかと氷をはね除けながらラーニヤへと猛進。その気迫と執念に皆息を飲む。

「ギャアアホオオオオオウ!!!」

そして遂にラーニヤを目の前に捉え、「ブレイククロー」を振り抜いた。

「ラーニヤツ！」

木造造りの壁に叩きつけられたラーニヤは、よろめきながらも立ち上がる。更なる追撃に思わず身構えるが、

「ゴ、ウキヤ…ギャオツ…」

当のヤルキモノは、攻撃した場所からは動かず、よたよたとふらつき千鳥足になっている。

見ていた者は、遂に血管が切れたかと心配になるが、どうやら違ったらしい。

「“ふいうち”か」

「E x a c t l y . ” つららおとし”!!」

そして特大の氷塊が放たれる。避けることもままならず、真正面からぶち当たったヤルキモノは大きく吹っ飛び、二度三度バウンドした後、そのまま目を回して仰向けに倒れた。

「ヤルキモノ、戦闘不能！」

審判の宣言に観客席は沸き立つ。センリのポケモンが地に伏せるのは本当に久しぶりの事であり、特にセンリのヤルキモノといえれば、それこそ並のチャレンジャーがなすすべなく手持ち全てを蹴散らされるのがザラだったのだ。

それはジムトレーナー達も同じ事、まさかあのヤルキモノが倒されるとはと驚愕する。

「ねえ、なんでヤルキモノは攻撃した後動けなくなったの？」

「え？う、うーん……」

「あれは“ふいうち”だね」

ハルカの疑問に隣で観戦していたエリートトレーナーが答える。ふいうちとは文字通り不意打ち。相手の攻撃する一瞬の間隙について打撃を撃ち込むあくタイプのだ。

ヤルキモノがブレイククローを当てるほんの一瞬、その間にラーニヤの膝がヤルキモノの顎を撃ち抜いたのだ。

そして、脳を揺さぶられたヤルキモノは棒立ちになり、仕留められた。

(マニニューラは素早い動きと引き換えに、その軽い身体は非常に撃たれ弱い。一撃でも食らえばそれだけで致命傷になりえる。だというのにダメージを受けることも見越してふいうちを叩き込んだ。

最初のねこだましといい、凄まじい胆力と正確さ。トレーナーとの信頼がなければとても真似出来ない……！)

彼はトウカジムに務めてそれなりに長く、センリの元でトレーナーとして技量を磨いて来た。

だが、それでも目の前のトレーナーの、底の見えない育成能力に息を飲んだ。

「行け、ケツキング!!」

「ゴッホ」

センリの最後のポケモンはケツキング。ナマケロから進化したヤルキモノが進化してまた怠けてしまったものぐさポケモン。その移り変わりには何処か哀愁漂うものを感じるが、その実はその身体に溢れんばかりのエネルギーを溜め込んでおり、動かないのはいざという時に備えるのことという見解もある。

そのケツキングが立っていた。1日のほとんどを寝そべって過ごし、食料がなくなつて渋々移動するケツキングが、二本足でどっしりと立ち上がっていた。

その姿にケンタは警戒を強める。

「かたきうち」

ボンッ!! と、音を置き去りにした拳がラーニヤに叩き込まれる。その巨体からは想像出来ない踏み込みによるスピードは、受け身を取る間もなく彼女を捉えた。

「カツ……!!?」

ラーニヤは再び壁に叩きつけられ、ひしゃげ陥没した壁から力なく崩れ落ちる。その様から戦闘不能なのは明らかだった。

「マニユーラ、戦闘不能!」

今度は声は上がらなかった。皆センリのケツキングに啞然としている。当のケツキングは、フウ、と息を吐きその場にあぐらをかいて座りこんだ。

「ッ!?ラーニヤッ!」

慌てて駆け寄ろうとするケンタ。その時、ボンッと、ケンタの着けたボールの一つが勝手に開いた。

「シャッ」

「っ、キツカー!?!」

現れたのは、キツクポケモンのサワムラー、ニツクネームはキツカー。

キツカーはケンタより先にラーニヤへ駆け寄ると、慎重に彼女を抱き抱える。

「シャアッ……」

「マニユ……」

キツカーはそのままラーニヤを観戦のようなベンチにまで運び、ハルカ達の傍らにゆっくりと寝かせる。そして、彼女を殴り飛ばした対戦相手へと振り返った。

「「ひいつ!!?」」

偶然にも、彼の顔を正面から見るとハメになったジムトレーナー達が悲鳴をあげる。

額には血管が何本も浮かび血走った目の奥には憤怒の炎が燃えている。激しい怒りに歪んだその顔はまさに鬼の形相であった。

「ちよっ、キツカー!?!お前の怒りもわかるけど、今は試合中やぞ!わかっとなのか!?!」

ケンタの言葉にキツカーは「わかっている」と手で示し、そのままケツキングと向かい合う形でフィールドに入る。ケツキングもまたビリビリと伝わってくる怒りの闘志を感じ、ニヤリと口角を上げ再び立ち上がる。

じつと対峙し睨み合う2体。その気迫に観戦をしていたトレーナー達は押し潰されるような圧迫感を感じた。

延々と続くかのように思われた睨み合い、先に動いたのはキツカーだった。その蛇腹状の両足をギチギチと押し込め、

「GO!!」

「サイツラツ!!」

その勢いそのままロケットのように突っ込み、ソバットの要領で”とびげり”を叩き込んだ。肺の空気を押し出され、ケツキングは顔を歪める。

「グオツ……!」

「ケツキング!?!」

「まだだ!」

「サイアア!!!」

そしてそのまま”ローキック”を両足に打ち込み姿勢を崩し、すかさず”インフアイト”の猛攻を叩き込んだ。

ドドドドドドドドドドドドドツツ

「ララララララララララアツツ!!!」

蹴る蹴る蹴る蹴る蹴る蹴る蹴る、蹴って蹴って蹴りまくる。残存すら見える防御度外視の蹴りのラッシュを受け、ケツキングの身体は徐々に浮き上がっていく。

「サイイ ラアア!!!」

「グオオオオオオ!?!」

そして渾身の蹴りがケツキングを打ち抜き、ケツキングは大きく

吹っ飛ぶ。

「グホッ！……ゴホオオオ!!」

「シャツ!？」

しかし、ケツキングは雄叫びを上げて両足を地面にめり込ませて無理矢理制止する。そして自分の腹から伸びたキツカーの足を掴み、そのまま無理矢理引き寄せる。

”カウンター!!”

「ゴオオオオオオオオウ!!!」

ドンツ!!!

カウンター、自分の受けた物理ダメージを二倍の威力で相手に返す技。その凶悪な威力の乗った拳がキツカーを撃ち抜き、殴り飛ばされたキツカーは壁を粉砕しながら場外へ消える。

「キツカー!？」

勝負あり、と、誰もが思った。あれだけの威力で効果抜群のインファイトを耐えきったケツキングも大概だが、その二倍のダメージを叩き込まれたのだ。起き上がれる訳がない、そう確信した。

対峙する彼らを除いては

「……………ッ、ラァ…シャアアアア!!!」

立ち上がって来た。ボロボロの満身創痍の様相にも関わらず、キツカーはしっかりとした足取りで再びバトルフィールドへと舞い戻ったのだ。

有り得ない、立てる筈がない、誰もがそう思った。しかし、誰も口には出来なかった。

「ほう、まさか今のをを受けて立ち上がって来るとは。驚いたよ。」

「どの口が。そいつ、チャレンジャー用のポケモンじゃないでしょ?」

「如何にも。こいつは私の手持ちで一番の古株。相棒と言っても過言ではない。」

やはり、と息を飲む。

通常、ジムリーダーは挑戦者の所持するバッチの数に応じてポケモ

ンのレベルを変えるのは有名な話だ。

しかしこれは正確ではない。正しくは、挑戦者のレベルに応じてポケモンを変えるのだ。バッチは飽くまでその分かりやすい指標に過ぎない。

ジムリーダーのたまかな役目は将来有望なトレーナーの育成であると同時にふるい落とし。挑戦者の技量と工夫次第で突破できるよう縛りを着けて戦っている。

だが、それでも勝てない。並大抵のトレーナーは阻まれる。故に難関。故にジムリーダー。

そのジムリーダーの最古参。即ち最初のポケモン。そのレベルは勿論、信頼、育成度は他のポケモンとは桁違いであろう。

(しっかしまあわかつちやいたけど、ほんとゲームの知識ら当てにならんわ……)

もしゲームであったなら、サワムラーがインファイトのカウンターを受けて倒れないのは有り得ない。もつと言えば、ケツキングがとびげり、ローキック×2、インファイトを受けて立っていること自体が不可能なのだ。ゲームの対戦ならチート確定である。

尤も、ゲームのストーリー上ではポケパルレで信頼度を高めれば、たまに体力が1だけ残るといふシステムはあった。だが、これはいくらなんでも度が過ぎている。

これがデータと、生身の違い。

今彼らは、それこそほとんど意地と根性だけで立ち上がっているのだ。

次の一撃で決まる。静寂がフィールドを包んだ。

「ギガインパクト!!!」

「とびげりげり!!!」

ドン!!!

ノーマルと格闘の最高威力の技がぶつかりあう。ぶつかり合う衝撃は風圧を生み、フィールドはひび割れ木張りの床は剥がれ飛び、観戦していたトレーナー達も吹っ飛ばされた。

ぶつかり合ったまま動かない2体。そして――

「グ……ゴホッ」

「……そうか、”ローキック”。足に打ち込んだ蹴りが一瞬動き出しを鈍らせた。」

「ガッ……ゴホッ……！」

「――見事だ。ケンタ君。」

ズシン、と、ケツキングが崩れ落ちた音が響いた。

「……審判、判定を」

「ツ!?は、はい！ケツキング戦闘不能、サワムラーの勝ち！よって勝者、チャレンジャー・ケンタ！」

ドツと、観客が沸き上がった。試合を見ていたトレーナーも、ポケモンも、土埃で汚れているのも気にならず、皆ありったけの歓声と拍手を送った。

「すごいすごいすごい……お兄ちゃん勝った……！」

ハルカは激突を征したケンタに心からの歓声を上げる。

方やユウキ、グラロウは、文字通り自分達とは次元の違うバトルを目の当たりにして息を飲んだ。

「……これが、これが、父さんと、ケンタさんのバトル……！」

「ゴロ……！」

(いつか僕／ぼくも、あの高みに……!!)

「ケツキング、大丈夫か？」

「キン……グ」

センリの呼び掛けに、ケツキングはのそりと上体を起こす。

「……負けちまったなあ」

「ケツキン」

「ありがとう、よく戦ってくれた。」

「ケーング」

「いいってことよ」そうケツキングは微笑んだ。

そこへ、ケンタとキツカーが歩み寄る。キツカーはケツキングの前に立つと、その手を差し出し、ケツキングの手を引き立たせた。

「ケン?」

「サラッ」

「…ケツキン」

「センリさん……」

「ありがとう、ケンタ君。私もポケモン達も久しぶりに暑くなれた。君との全力のバトル、実に心踊ったよ。……よくここまで精進したな。」

「いや、そんな……っ、はい!こちらこそ、ありがとうございました!」

センリからの称賛に、ケンタは心からの感謝を示す。

自分にバトルの手解きを着けてくれた、トレーナーとして自分を育ててくれた人物。彼もまた、この世界における自分の親同然の人だった。

「…マニユツ」

「ツツツ!!?ワツワツ~~~~ツ♥?♥?」

その時、ラーニヤの声を聞いたキツカーは一瞬にして豹変し彼女へ駆け寄る。目はハートになり身体をグネングネンと揺らし、だらしなさを全身で体現していた。

「んワツワツ~~~~ん♥?♥?♥?ワラワラワラ~~~~!!?ワラツ、サイラ~~~~!!?」(んラーニヤすわ~~~~ん♥?♥?♥?俺どうだった~!!?惚れなおした~!!?)

「マニヤツ!マニユマニユ!!マニヤーマニヤ!!」(うるっさいのよ!あんたらのせいで埃まみれじゃない!!)

誉めて貰えると思ってたのにラーニヤにひっぱたかれてショックを受けるキツカー。その切り替わり様に皆呆気にとられる。



「……それはさておき、」

「さておくんですね……」

「受け取ってくれ、バランスバッチだ。」

センリはジムリーダーに勝った証、トウカジムのジムバッチをケンタに差し出す。ケンタはそれを震える手で受け取り、そして、溢れんばかりの喜びが身体中を駆け巡るのを感じた。

「~~~~ツツ!!?ー!!!いよっしやああああああ!!! 『バランスバッチ』!ゲットだあああ!!!」

飛び上がって喜ぶケンタとポケモン達。そんな彼らに皆が惜しみ無い拍手を送った。



「………で、どういうことなの、これは?」

溢れんばかりのオーラを放って仁王立ちするセンリの妻の前で、センリ、ケンタ、キツカーとケツキング。そして何故かジムトレーナー達までが正座させられていた。心なしか空気が歪んでいるような気さえする。

「いや、その、これは……」

「つい、やり過ぎたと言うか……」

「つい? 壁が吹き飛んで床板が剥がれて土がめくれ上がってるの? ついなの?」

「いやっ! これはほらっ……い、言うなれば男同士の戦いの勲章とでも」

「今すぐに片付けなさいああああああい!!!」

『『『はっはいいいいいいいい!!!』』』

こうして、ケンタとセンリ並びにそのポケモン達、及びジムトレーナー達は総出でジムの復興作業に取りかかることになり、ケンタ達の旅立ちはそのから一週間後のことになった。

## タチフサぐパンクな刺客

104番道路。トウカシティを抜けた海沿いの道をケンタ一行は歩いていた。

sideケンタ

「このまま道なりに進めばトウカの森が見えてくる。ホウエンで最も広い森林公園だ」

「へえー、どんなポケモンがいるのかなー?」

「深い森だからな、むしタイプやくさタイプのポケモンが多いな。なかでもキノココっていう、この森固有のポケモンもいるぞ」

「へえー!どんなポケモン!？」

「こんな」

『キノココ きのこポケモン くさタイプ』

深い森の湿った地面を好む。ピンチになると一斉に猛毒の胞子を撒き散らす』

「わあーかわいいかもっ!」

「まってハルカちゃん。後半ものすごく危険なこと書いてるよ」

ハルカはキノココの容姿に興味しんしんといった様子だが、ユウキ君はその説明文に目が行ったようだ。ハルカの付き添いで着実に危機察知能力が身に付いて行ってるな。

「ユウキ君の言うとおり、キノココはレアだが同時に危険なポケモンでもある。おまけに生息してるのは木の入り組んだ森の奥深くだ。実際キノココ狙いで森の奥まで行って帰ってこなくなったトレーナーもちらほらいる」

「ひいつ!!？」

ハルカとユウキ君は今の話ですくみ上がっている。

「ま、カナズミまでの道のりはちゃんと整備されてるから、道なりに進めば迷うことはない。はぐれないようにちゃーんと着いてくるように」

「はーい!」

こうして俺たちは心地のいい潮風に吹かれながら、トウカの森への浜道を歩いて行った。

「ふふん、待っていたよ庶民達」

「あん?」「?」

いよいよトウカの森へと差し掛かろうという時、入り口の前に立ち塞がる者がいる。

セットした金髪に高そうなスーツという身なりのいい出で立ちの、いかにもなお坊っちゃんという姿をした男だった。

「ああ、なんだ。金ツルのミツグか」

「はっはっはっ、よーしふざけんなてめえ」

声を掛けた張本人たるミツグは、青筋を浮かべて微笑むという無駄に器用なことをしながら俺たちに積みよってきた。

「お兄ちゃん、この人お兄ちゃんの知り合いなの?」

「ふっ、よくぞ聞いてくれたねお嬢さん。そう、何を隠そうこの僕は」

「重役のどら息子」

「そうそうウチの家政婦にも「坊っちゃんつたらまくた遊び惚けてえ〜」とか影で言われてってちがああああう!!?僕はデボンコーポレーション重役の1人息子の成木ミツグだ!!<sup>オタマキ</sup>芋環ケンタ!今日こそキサマとの因縁に決着を着けてやる!!」

キレのいいノリつつこみを決め、ミツグはこちらを指差し高らかに告げる。

「因縁って……ケンタさんこの人に何かしたんですか?」

「ん?ああ……………」



あれは俺が父さんのフィールドワークの手伝いで旅を始めたばかりの時だった。

『その庶民、この僕とバトルをする名誉を与えてやろう』

『あん?』

と、こんな具合で唐突にこいつにバトルをふっかけられ、まあ俺

も買うことにした訳だが……

『ふむ、参考までに聞くが、所持バツチは幾つだい?』

『ゼロ』

『ぶふおつ!? ははは w w w こりや失礼 w なんだ君は駆け出しか。これは悪いことをした w w 僕が余裕で勝ってしまうじやな w い w か w w』

『……………』

『はははー! よしこうしよう! もし君が勝ったら賞トレーナーズプライズ金 相場の倍……いやいや3倍を支払おう! もし勝てればだけど w w w』

『……………』

『ふふふははは! まあ、僕も勝負というからには手加減なしでやらせて貰うよ。気に病む必要はない。トレーナーなら敗北を知り学ぶことも大事なことからね w w w』

『……………』

『さあ! 今日この僕に出会ってしまったことに後悔したまえええええええええ!!』

~~~~~10分後~~~~~

『……………で、なにか?』

『すみませんマジ調子こいてました』

その後、手持ち全てをバーンに瞬殺され、なおも食って掛かろうとしたところを顔面を掴んで持ち上げられたミツグの姿があった。

『くっ! このままですむと思うなよ!!』

と、テンプレな捨て台詞と賞金21600円を残してミツグは去って行った。



「とまあ、その後も俺の行く先々で唐突に現れては勝負

を吹っ掛け、そのたびに返り討ちにされては俺に金を巻き上げられるんだ」

「へ、へえ……」

「悪意のある紹介してんじゃねえ!!」

何気にこいつとはもう5年近い付き合いになる。因みに、俺は立場上研究者見習いということになってるので、資金の方は父さんの方からある程度融通してもらっているのだが、あくまでも研究資金なのでこいつから手に入る賞金は捨て金自由に出来る路銀としてそこそこ助かっていたりするのだ。

「ふん！余裕をかましていられるのも今日までだ!!今日という今日は貴様に吠えずらかかせてやる！そのための秘策があるのだから!!」  
「今時吠えずらなんて言葉使わねえだろ」

「せがらしいわ!!いちいち上げ足とんじゃねえ！」

ミツグはキレ気味にベルトからモンスターボールを取り外し、それをこちらへ向けて構える。

「もういい、シンプルに言つてやる。トレーナーは、目と目が合ったら

「ポケモンバトル……ってか?」

そして、どちらからともなく、同時にボールを放った。

sideハルカ

やがて始まったお兄ちゃんとミツグさんとの2対2のポケモンバトルは、私たちの思っていた以上に高レベルなものだった。

開始早々、〃はらだいこ〃によって攻撃力を最大まで高めたミツグさんのマツグマの〃ずつき〃や〃きりさく〃の猛攻。それをラーニヤちゃんはひらりひらりとかわして〃けたぐり〃や〃つじぎり〃で着実にダメージを与えていってる。

〃ふいうち〃っー!

「マニユツ!!」

ドムッ

「グマツ……………」

「決まった……………」

ユウキ君がそう呟く。ラーニヤちゃんの拳がマツスグマの鳩尾に突き刺さり、マツスグマは苦しそうに顔を歪めて倒れた。

「クソツ……………戻れマツスグマ、ゆっくり休んでくれ」

ミツグさんはそう言ってマツスグマをボールに戻した。

ミツグさんは強い。最初はちよつとおマヌケな人なのかなって思ってたけど、多分今の私たちじゃ相手にならないくらいに強い。

けど、それでもお兄ちゃんにはかなわずなかった。やっぱりお兄ちゃんは、トレーナーとして、私たちよりも遥かに先に居るんだ……………！

「どーしたミツグ、前回と大して変わってねえぞ？」

「んがっ!?……………ああ、そうとも。この一年、マツスグマの育成に十分手を回せなかったのさ」

そう言って、ミツグさんはベルトから黒いモンスターボールを取り出した。

「ダークボールか」

「ああ、お前を倒すために他の地方から取り寄せたジョーカーだ。あまりにも狂暴で育成には苦労させられた。……………だが、その強さは折紙付きさ!!」

そう言ってミツグさんはモンスターボールを投げた。

「グマアアアアアア!!」

そうして現れたのは、見たことのないポケモンだった。

黒と灰色の体毛に鋭い爪の付いた前足、そして赤く鋭い目が印象的な、とつても怖そうなポケモン。

「おいおい、えらくパンクなルックスしたポケモンだな。そいつが切り札ってやつか」

「いかにも、その名もタチフサグマ。ガラル地方に生息するジグザグマの”原種”。その進化した姿さ」

『タチフサグマ ていしポケモン』

ノーマル・あくタイプ マスグマの進化系

ガラル地方固有種。ガラル地方の過酷な生存競争を生き抜いたマスグマのみが進化できる。とても獰猛で好戦的』

そんな説明文が凶鑑から流れる。タチフサグマと呼ばれたそのポケモンは、長い舌をペロリと垂らして、ラーニヤちゃんをニタニタ嘲るように睨んでいる。

「さあっ！このタチフサグマの強さに恐れおののいて「ギャオオオオオオ!!」っておい!？」

タチフサグマはミツグさんの指示も待たずに鋭い爪を光らせラーニヤちゃんを狙う。

「ブレイククロー」だ!」

「かわせ!」

「マニユツ!」

ラーニヤちゃんはタチフサグマのブレイククローを紙一重で避ける。タチフサグマそれに露骨にイライラした顔を浮かべて何度も腕を振るう。けれどそれもことごとくかわされている。

「タチフサグマ!指示も待たずに動くな!!そいつらは雑に戦って勝てる相手じゃねえ!!」

「チツ!」

ミツグさんの指示も無視して、タチフサグマはラーニヤちゃんに爪を振るう。ラーニヤちゃんはそれを「見切って」かわし、その放物線上に触れた地面や木は大きく抉れた。

「うそっ……!」

「なんて威力だ!」

「こおりのつぶて!」

そんな技にもぜんぜん怯まず、ラーニヤちゃんの放ったこおりのつぶてがタチフサグマにヒットし、タチフサグマは後ろにぶっ飛ばされる。

「グマッ……!」

タチフサグマは歯ぎしりをしてラーニヤちゃんを睨み付ける。

「わかつただろう。そいつらは並み居るザコとは違う。無様に負けたくなければ僕の指示を聞け」

「oooooooooo!!?」

タチフサグマは血走った目でミツグさんを睨み付けるけど、ミツグさんはぜんぜん怯んでない。わたしなら腰抜かしちやいそうなくらい怖い顔なのに……やっぱりあの人もすごい！

「…………成る程ね。戻れラーニャ」

すると、突然お兄ちゃんはラーニャちゃんをボールに戻した。

「つたく人を上手く使いやがって……望み通りにしてやるよ。行けバーン!!」

「バクoooooooooo!!」

出てきたのはバクフーンのバーンちゃん。炎の鬣を燃やして真っ直ぐにタチフサグマを見据えている。

「出たなバクフーン……………」

「バツク」

「グルルルルル……………」

「…………ニヤリ」

「oooooooooo!!?グマアアアア!!」

バーンちゃんはタチフサグマを見て嘲るように笑う。それにタチフサグマは一気に激昂してバーンちゃんへ”とっしん”する。

「かえんほうしや!!」

けど、それより早くかえんほうしやの炎がタチフサグマを火だるまにした。

「グオオオオオオ!!?…………グマアアア!!」

タチフサグマは炎に包まれてなおバーンちゃんに襲い掛かる。なんて執念なの!?

「つたくあのバカっ!!」

「かわらわり!!」

ドンツ

「ガハツ…………!!」



「あーあー、もう」

バーンちゃんのかわらわりが頭にめり込み、タチフサグマは膝から崩れ落ちる。その目は最後までバーンちゃんを睨み付けていた。

sideケンタ

「はあークソ。一体くらいは倒せると思ってたのに」

「よく言うわ。人のこと当て馬に使いよってからに」

「え？当て馬って？」

ハルカとユウキ君は俺が当て馬と言ったことに疑問を浮かべている。

「お兄ちゃん、どういうことなの？」

「ああ。さっきのを見てわかったかと思うが、こいつはタチフサグマを扱い切れていない。いや、あの場合経験が足りないと言った方が正しいか」

ハルカは今一つよくわかっていないようだ。

「経験？」

「そ。大方経験値を稼ぐために勝てる相手としかバトルしてなかったんだろ。それで、バトルの上で重要な危機察知能力が育ってないし、トレーナーの指示を聞く利点を理解していない。なにせ、ただ戦えば勝てるからな。そうだなミツグ」

「ぐっ！……ああ、そうだよ。ガラルからジグサグマの原種を取り寄せて、この一年かけてタチフサグマに進化させたはいいが、すっかり自尊心の方も育ってしまっただね。思い上がって全く言うことを聞きやしないのさ。そのせいで本来の戦いかたも出来ない始末さ。はあ、やだやだ」

「昔の自分を見てる見たいで？」

「そうそうってやかましいわっ!!」

再びキレのいいノリつつこみを決めたミツグは、きびつを返し歩いて行く。

「ま、今回のことはこいつにもいい経験にはなっただろう。次こそは

まともなバトルをして見せるよ。…………それが僕の目標でもある」

「ミツグ……」

「じゃあな」

そう言い残し、ミツグは颯爽と歩いて行く。あいつ……

俺はやつの背中を追いかけ、

「おい、勝ったんだから賞金よこせや」

「やっぱ覚えてた!?!」

「お兄ちゃん台無しかもっ!?!」

こうして、旅の資金を巻き上げた俺たちは、改めてトウカの森へと入って行ったのだった。

## ゆうきを翼に込めて飛べ 前編

トウカの森。トウカシティからカナズミシティの中間地点に位置する広大な森林地帯である。

古くからポケモンの生息地として有名であり、特にその深部に存在する密林は、この地域固有のポケモンの生息地に指定されている。

そして、ひとたび順路を外れ奥地に入り込めば、森は入り組んだ樹木と生い茂った苔による天然のダンジョンと化す。事実、トレーナーや密猟者がこの森の固有種であるポケモンを求め深部へと入り込み、そのまま消息を絶つケースも毎年後を絶たないのだ。

だが、それでも毎年順路を外れ深部へと進もうとする者は一定数存在している。それほどまでに、世のトレーナーやポケモン愛好家にとってレアなポケモンというものは魔性の存在なのだ。

「で、我々はそんな森をポケモンの生態調査をしつつ進んで行くわけだ。さつきも言ったけど、はぐれないようしっかりついてくるように」

「「はい」」

先頭を歩きながら引率として注意を促すケンタ。そして元気よく返事をする3人の声。

「はいストップ」

「「？」」

「……………何でおるねんミツグ」

そう、先ほどトウカの森入り口付近でバトルを仕掛けてきたおぼっちゃまのミツグが、何故かそのままついてきているのである。

「いやいや。何でも何も、僕の実家はカナズミだからね。一旦顔出しに帰る途中なんだ」

「だったら一人でさつきと行けばいいだろうが。なんでわざわざついてくるんだよ？」

「まあまあそう言わずに。旅は道連れ世は情けって言うじゃないか」「帰れ」

「ふむよろしい。ならばこうしよう」

そう言うミツグは、その場でそれは見事な土下座を披露して見せた。

「一緒に連れてってくださいお願いします」

「お前のプライドってどうなってるの？」

腐葉土の地面に頭を擦り付けるミツグ。その恥も外見もない姿にケンタは冷ややかなツツコミを入れる。そして、そんな様のミツグにハルカとユウキも気の毒な視線を向けていた。

「ねえお兄ちゃん、きつとミツグさんひとりじゃさみしいんだよ。連れてってあげようよ」

「ケンタさん、ここは連れて行ってあげましょうよ」

「あれ、おかしいな？なんで俺が促される立場になってる訳？」

まさかの身内からの援護射撃にケンタはたじろぐが、やがて尚も土下座の姿勢を保つミツグに目をやり、ため息を吐いた。

「はあ……わかったわかった。連れてってやる連れてってやるから」

「そうかそこまで言うならついて行ってやろう!!」

「マジでなんなんだよお前は」

ミツグの変わり身の速さにケンタの冷淡なツツコミが決まった。

そんなこんなで、一時的にミツグを加えることになったケンタ一行はトウカの森を進んでいった。

「わはあく、タネボーがいち、にい、さん……12匹、枝からぶら下がってる〜！かわいいー♥?」

「あ、ナマケロだ。父さんのジムにいたやつより若干小さいや」

「ケムツソの群れ、ざつと20……いや、34か。やつぱトウカ産のは他よりよく育って……あ、スバメに2匹もってかれた……」

ある程度開けた林道を起点に歩きながら、遭遇したポケモンの種類や数を記録していく。途中野生のポケモンや一般トレーナーとのバトルを挟み経験値を稼ぎながらも、一行は兼ね順調に進んでいると言えた。

「よし、今日はここでキャンプにするぞ。各自用意するように！」

「はーい!!」

「うん、だいたい予想してたけどやっぱお前も混ざるのね」

もはやごく当たり前のように混ざっているミツグに、ケンタは早々にツツコミを諦めテントを組み立てる。

事実、曲がりなりにもトレーナーとして先輩であるミツグは、ハルカとユウキに危険な場所を教えたり、不用意なバトルを避けるよう誘導したりとそこそこの役に立ってはいたので、邪魔にならなければある程度は黙認することになっていた。

それに、旅のトレーナーが安全の為共同でキャンプを張ることは割とよくある情景である。

「あ、ごめん。僕今日は日帰りのつもりだったからテント持ってないんだよね。てか、そもそも今までホテル泊まりだったから、野宿もしたことないや。テント入れて〜」

訂正、早速後悔してきた。結局、ミツグはケンタのテントで同宿することになった。

「いや〜にしても狭いねこれ。ウチのトイレの半分以下じゃん。モンスターボールの中ってこんな感じなのかなあ?」

「叩き出すぞてめえ。てか、俺明日は深部の調査に行く予定なんだから、お前どうすんの?」

「うん?あ、やっぱ行くんだ」

ミツグは少し考える素振りをしてからケンタに返した。

「いや、止めておくよ。君の仕事にまで顔を突っ込むほど無粋じゃないや」

その返事にケンタは以外だとはかりの顔をする。

「ふーん、お前にも社会的良識ってものがあつたのか。以外だわ」

「君、僕のことどういいうイメージで見てるわけ?」

「行く先々でまとわりついてくる拗らせストーカー金づるホモ」

「よっしゃ表出るコラ。タイマンでやってやる」

そして、翌朝

「…………と、そういうわけで、明日俺は森の深部へ調査に向かうから、二人はミツグと一緒に先にカナヅミに向かつていてくれ」

「え〜!?わたしもキノココちゃん見たかったのに〜!」

「仕方ないよハルカちゃん。僕ら新人トレーナーには危険過ぎるんだよ」

不満の声を上げるハルカと対象に、ユウキはそんなハルカを宥める。この年で危機察知能力が着々と身に付き始めているようである。

「けど、ケンタさん一人で大丈夫なんですか?」

「何、心配いらんよ。今までもこういった場所で調査は何度もしてきたし。それに事前にカナヅミ市役所と父さんには連絡は入れてある。24時間以上連絡がなければポケモンレンジャーが派遣されることになってるんだ」

「ああ、なるほど」

ケンタの説明に二人はひとまず納得はしたようだ。

「ま、言うほど危険な調査でもないし、2日もあれば終わるだろ。」

その間カナヅミでジム戦でもしてみたらどうだ?」

「ジム戦!!」

ケンタの提案にハルカとユウキは浮き足立つ。

「やるやるやる!ジム戦やりたい!」

「僕も!自分の実力を確かめたいです!」

「なははっ、その意気その意気」ケンタはそう言うとミツグへと顔を向ける。

「じゃ、そういうことだから。カナヅミジムまで引率よろしく」

「OFF COURSE まかせたまえ。新人を導くのは先人トレーナーの義務だ」

ケンタの申し付けにミツグは快く頷く。なんだかんだで良識のある男なのだ。

「ああそうだ。カナヅミのジムリーダーはいわタイプの使用手だから、ハルカはこの森でくさタイプのポケモンをゲットして行くのがいいだろう。まだ時間もあるし、俺も手伝うよ」

「あっ!じゃあわたし、昨日見つけたタネボーちゃんがいい!」

「よし、それじゃあタネボーのいた木へ行こうか」

こうして、ケンタ一行は昨日タネボーの群れを見つけた林へと向か

う。

林の木には、ドングリの姿をしたポケモン、タネボーがいくつも枝にゆらゆらとぶら下がっていた。

『タネボー　どんぐりポケモン

くさタイプ

木の枝へぶら下がって栄養や水分を吸収している。

どきどき木の実と間違えて　ついばみにきた鳥ポケモンを驚かせて遊ぶ。』

「どいつにする?」

「えーとえーとっ」

ハルカは枝のタネボーを見比べてうんうん唸る。やがてその中の一匹を指差した。

「あ、あの子!あの子が一番コロコロでかわいい!」

「おっ、あれか。確かに健康的でいい面構えだ。やるなハルカ」

「えへへ〜♪」

ハルカの指差した個体を見て、ケンタは満足気に頷き頭を撫でる。どこを向いても無表情のどんぐりフェイスである。

(ぜんぶ同じに見える……)

(全部同じに見える)

「よーし、それじゃ早速……おや?」

「?どうしたんですかケンタさん?」

「いや、あれ」

「スバ〜」

ケンタが指差した先には、スバメが一羽林の向こうからこちらに飛んできていた。

『スバメ　こツバメポケモン

ひこう・ノーマル　タイプ

自分よりも大きな相手にも勇敢に戦いを挑む。

お腹が空くと大声で鳴く。』

「あのスバメがどうかしたんですか？」

「ああ、スバメは本来群れで生活しているポケモンなんだ。

進化して独り立ちしたならともかく、ああして一匹だけでいることは滅多にないんだが……」

「成程、確かにそのとおりだ」

ケンタの疑問にミツグも同意し、ハルカとユウキは二人の知識に関心する。

スバメはタネボーたちのいる木に留まると、そのうちの二匹へと近づいて行く。偶然にもそれはハルカの選んだタネボーだった。

「スバ〜」

「カカ？」

スバメはタネボーを見てよだれを垂らしている。どうやら木の実と勘違いしているようだ。

「スバ、スバスバ？」

「カカ、カカカ!!」

「スバーー!!」

スバメはくちばしでタネボーをつつくと、タネボーが大きく体を揺らして脅かす。スバメはそれに仰天してひっくり返ってしまい、そのまま枝から落ちてしまった。

「あつ、やばっ!」

ケンタはとっさに飛び出しスバメを受け止める。

「大丈夫か？」

「ス、スバア……」

ケンタはスバメが無事なことを確認すると地面に降ろす。一方木の上ではタネボーたちがその様をケラケラと笑っていた。

「カーカツカツカツカ♪」

「スバーー! スバスバーー!」

「カカ? カカカツカツ!」

ボムツ!!

「スバーー!」

「なっ!?! うおわっ!」



スバメは笑うタネボーに抗議する様に鳴き声を上げるが、それに対してタネボーは「タネばくだん」をお見舞いする。

あわや直撃したスバメは黒焦げになって目を回し、一緒にいたケンタも吹っ飛んでしまう。

「け、ケンタさん大丈夫ですか!?!」

「あたた……ああ、なんとかな。」

「つーかあのタネボー、”タネばくだん”なんて使えるのかよ……」  
「むむむ……コラー!!なんでそんなことするの!?!お兄ちゃんまでケガするじゃない!」

「カカカカツ!カーカカ!!」

ケンタが感心するそばでハルカはタネばくだんを撃ったタネボーに怒る。しかし、タネボーはそれもケラケラ笑って体を揺らし、枝からポトリと落ちる。

「カカカカツカツカー!」

そして、枝から落ちたタネボーはまばゆい光に包まれる。

「うえ!?!」「あれって!」「ほほう」「なんと、進化だ」

「コーノハツハツハー!」

そして、タネボーはコノハナに進化した。

『コノハナ いじわるポケモン

くさ・あく タイプ

うっそうと 茂った 森に すむ。 草笛の 音色で 旅人を惑

わせ 面白がる。

長い鼻を 触られることを 嫌う。』

「スツスバー!スバ〜」

「コーノハツハツハー!」

目を覚ましたスバメだったが、コノハナの姿に完全におびえてしまっている。コノハナはそれを見て指を刺してゲラゲラ笑う。

「こらー!いい加減にしなさいー!」

そこへハルカが割って入った。

「なんでそんなにいじわるするの!?!スバメちゃんかわいそうじゃない

!!」

「ハッ、コーノノ！」

ハルカはコノハナを叱り付けるが、コノハナはアカンベーをして反発する。

「ハルカ、いじわるポケモンにいじわるすんなって言っても……」

「黙ってて!!」

「はい」

ケンタの無粋な発言をバツサリ切り捨て、ハルカはずんずんとかっていく。

「いじめっ子はゆるさない！いくよチャモ！」

「チャモー！」